

<座談会>田中義久教授の社会学と法政大学社会学部の歩み

MIYAJIMA, Takashi / 小川, 文弥 / FUNABASHI, Harutoshi / 宮島, 喬 / 藤田, 真文[司会] / ITO, Mamoru / 船橋, 晴俊 / FUJITA, Mafumi [Moderator] / OGAWA, Bunya / 田中, 義久 / KOBAYASHI, Naoki / 伊藤, 守 / 小林, 直毅 / TANAKA, Yoshihisa

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)
56

(号 / Number)
4

(開始ページ / Start Page)
23

(終了ページ / End Page)
58

(発行年 / Year)
2010-03

(URL)
<https://doi.org/10.15002/00021072>

【座談会】

田中義久教授の社会学と 法政大学社会学部の歩み

田中義久

小川文弥

宮島 喬

船橋晴俊

伊藤 守

小林直毅

司会：藤田真文

2009年11月21日

法政大学九段校舎 4階 A会議室にて

藤 田 それでは『社会志林』田中義久教授退職記念号企画で座談会「田中義久教授の社会学と法政大学社会学部の歩み」を始めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。私は司会をさせていただきますが、この上座にいるのが申し訳ないような、むしろ一番年下の研究者として、みなさんと田中先生の議論を聞いて、歴史的に継承しなさいという意味で私が司会になっているのだと思っていますので、そのつもりで交通整理をさせていただきます。

最初に東京大学の新聞研究所の助手時代、オックスフォードの留学までの主要著作に見る田中先生の社会学的な研究についてお話をしていきたいと思ひます。私自身は田中先生の著作と最初に接したのは『社会意識の理論』です。1978年の刊行で、これは私が大学に入学にした年です。読んだのはもっと後で、修士論文を書くときに政治意識の理論をテーマにしましたので、そこで読ませていただきました。この本を読むと自分が25年前に引いた線があつて懐かしいというか、そのときの自分としての主体はどんなものだったろうと思ひます。私は田中先生の研究歴の半分ぐらいしか存じ上げず、同時代として歩んできたのは半分ぐらいで、それ以前のことは知りません。まず宮島先生から、助手時代から『社会意識の理論』に至るまで、田中先生とともに歩んできた社会学、田中先生の社会学をどうぞ覧になっていたかお話をいただければと思ひます。

60年安保、東大闘争という歴史の中の社会学と「人間的自然」

宮 島 田中さんとは大学学部時代から同じ研究室におりまして、指導教授も同じで、大学院の修士課程までも一緒でした。安保闘争があり、その最中に私は入学し、田中さんは1年遅れたかもしれませんが、経験したことに違いはありません。安保闘争を社会的にどう受け止めるかということは直接あまり議論をしませんでしたが、その後大学紛争（あるいは大学闘争）が起きましたときに、社会学のあり方もその中で問われているのではないかと考え、田中さんと議論をし、『社会学評論』に投稿したりしました。

その当時の大学を取り巻く社会環境と、大学それ自体が1個の社会でしたから、その中での決定と自由という問題について、随分考えたり、議論しました。当時は、高度経済成長の只中でしたが、管理社会化が大学紛争を通じて問われたわけで、それに対し、ややアナキーなぐらいに反管理ということ掲げた全共闘の運動がありました。私たちは助手でしたからもちろん同じ立場は取りえません。大学の教員の端くれでありながら、しかし教授会メンバーではなく、私どもの所属している大学が、本当にオーセンティックに学生から提起された問題を取り上げて解決しようとしたかという点で疑念があり、大学のあり方、研究者のあり方を非常に考えさせられました。

田中さんはマルクス主義的な社会学の可能性についていろいろ考えておられたと思うのですが、基本的には人間的自然という概念が使われて、そこから出発して行為論、さらには関係論、そして社会構造論を組み立てようとしていた。人間的自然というコンセプトですが、今から考えてみると「自然」という言葉を田中さんはあえて使われました。これは自然そのものではないが、人間の本源的な諸力を積極的なかたちで見いだそうということだったと思います。本源的な欲望と言われたりもしました。人間的自然の中にすでに共同性への契機が秘められていて、そこから共感とか、友愛とか、同情が出てきうるのではないかと考えておられたようです。ですから、人間的自然的諸力と表現されて、行為の主体性の基礎を根本から考えるという姿勢をずっともっておられました。

同時に田中さん自身は公式的な議論は好きでなかったようで、非常に現象的に多様なものを視野に入れておられ、またそれだけの視野の広さがありました。私が今覚えているのは例えばメルロ＝ポンティの身体論、あるいはベルクソンの記憶でしたか、こういうものも柔軟に取り入れておられた。メルロ＝ポンティは心身二元論を超えて生命と精神の統一的な動き、働きというものをつかもうとする、そういうものの中に人間的諸力を見ようという努力をされていた。非常に多くのことを教えられた記憶があります。

藤 田 ありがとうございます。今まさに座談会全体の基調を作っていたいただいたような気がします。私も先ほど言ったように『社会意識の理論』を読み直してみて、田中先生の記述の中で、先生の社会学の方法論的な基礎をなすものだと思っているのですけれども、この中で現代の社会意識の分析の方法を理論的分析と歴史的分析の内的統一の視座のうちに確保しなければいけないということをおっしゃっています。例えば人間的自然という概念を抽象的な概念として理解されるのではなく、むしろ歴史の中でそれがどのように形成されてきたかということも統一的にとらえるという、

2つの難しい課題に取り組まれてきたと私は思います。私などは、むしろ歴史的なものを入れ込むということがなかなかできないのです。抽象的な、認識論的な概念のみをもって社会を見るということしかできないのです。そのダイナミクスが自分にはないのだということをあらためて読みながら思っていました。

田中先生、今宮島先生にまとめていただいたことをどのように受け止めていらっしゃるでしょうか。

田中 どうもありがとうございます。大変懐かしい時代の話の伺ったような気がします。後の船橋さんのお話ともつながると思うのですがけれども、我々3人とも助手をしているわけですが、私は確か67年から新聞研究所の助手になったのですが、宮島さんは何年から文学部の。

宮島 同じです。67年ですね。

田中 同じ年になったのか。それは奇遇ですね。ちなみに船橋さんは何年ですか。

船橋 76年です。10年ずれています。

田中 76年になると東大闘争はそれなりに。

船橋 そういう意味では沈静化というか。67年入学ですから。先生方が助手になったときに私は1年生ですから（笑）。

田中 私は、まさに60年安保の年に入学しているのです。宮島さんは1級上です。僕は都立小石川高校で、実は今総理大臣になった鳩山由紀夫さんと同じ高校です。昼間は東京都庁の給仕さんをしていて、夜に小石川高校の定時制、夜間部に通っていたわけです。そんなことで15歳から55年近く働いているわけです。そういう文脈で東大闘争も見たいし、助手という仕事もしていたわけです。1つ付け加えると東大闘争の過程でも、私は新聞研究所の労働組合の書記長、委員長をやらされて、宮島さんも当然何かやらされたと思うのですが、ある年の安田講堂の前の全学集会に僕の横に座っていたのが文学部の職員組合の旗を持った稲上（毅）君なのです。そこで座り込んで全学集会をやりながら社会学の話をしているわけです（笑）。そういう非常に緊張感のある中で社会学の勉強をさせていただいたということで、ある意味ではいい時代に勉強できたなという気がするのです。

そんなわけで、最初から大変な歴史のダイナミズムの中で社会学をやらされる、社会学の勉強をするという巡り合わせの中で始まったなという気がします。

藤田 禁欲的ですね、先生（笑）。それでは船橋さんから、今お話がありましたけれども、10年の間を置いて社会学の道に入られたということで、『人間的な自然と社会構造』とか、『私生活主義批判』とか、田中先生の著作を今振り返って読まれて、どのようにお感じかということをお話いただければと思います。



田中義久
法政大学 社会学部教授

船橋 今、宮島先生はミクロの場面で特に生活経験を共有されていたところからお話があったと思うのですが、私はもう少しマクロの社会学全体の流れと世代の基礎経験という点から、私なりに田中先生の問題設定の意味を位置づけてみたいと思います。言うまでもなく、戦後日本の社会科学においてマルクスとヴェーバーの影響力は圧倒的だったと思います。その根本にあるのは天皇制ファシズムに対する批判意識なり、自己批判であり、いかにして民主主義的な日本社会をつくるかということが、非常に大きなモチベーションとしてあったと思います。

その中でさらに左翼的な社会運動の潮流においては、当然資本主義社会の持つさまざまな問題点がマルクス主義的な理解の枠組みで絶えず批判の対象になりました。民主化というコンセプト自体は非常に広範な人々に共有されていると思いますが、資本主義批判というスタンスはより限定された知的潮流だと思うのです。その中でもマルクスの影響が圧倒的だったと思います。ところが世界史の現実の中で、早くは1950年代のハンガリー動乱あたりから、果たして存在するところのいわゆるソ連・東欧社会主義諸国とはなんなのかという疑念がだんだん広まってきて、それは1960年代になると非常にいろいろな意味で深刻になってきます。特に68年は、田中先生の著作にも68年の重要性ということは再三指摘されていますが、68年の「プラハの春」を1つの象徴的な事件として現存するソ連・東欧社会主義諸国に対する疑念が非常に深まってきたと思います。

そうかといって、それではアメリカをリーダーとする資本主義諸国の現実はいかなるものかと思えば、当時はベトナム戦争が深刻な問題として存在していました。多少社会的な問題意識を持った若い世代から見ると、非常に荒っぽい言い方をするとアメリカもソ連も信じられないと、こういう社会意識が広範にあったのではないかと思います。それを上の世代でより早く感じられていた方もいたのではないかと。田中先生はそういう方のお一人ではないかと私は理解しています。大局的に言うとマルクス主義離れ、あるいはマルクス主義の威信が低下している中で、そうかといって安易にマルクス主義離れをするのではなく、マルクスの持つ真価を再発掘して、それを社会学的な言葉で再定義しようというのが、根本的に田中さんの基礎にあるものではないかと私は理解しています。

マルクスの真価はどこにあるのかということになると、一番根底的に議論を絞り込んでいくと、私は物象化論だと思っています。物象化論というのはその前提に人間論的関心というものが強烈にあって、それが現実の資本主義社会の中でどのように物象化した社会形態が存立してくるのかを問うものです。人間的諸力が人間に対して敵対的、あるいは抑圧的なものに変質してしまっている、それはなぜなのか、そこが物象化論の根本的問題だと思うのです。そこに田中先生の著作の、いわば通奏低音があるのではないかと私は理解しているのです。

田中先生の著作は非常に該博、広範な知識に裏打ちされていますから、大学院生に感想を聞いても非常に難解だという批評がしばしば来るのです。しかし、今言った根本の時代認識があって、その中で既存の社会主義諸国にのみみじくも前期社会主義という言葉を使っているのです。前期社会主義諸国と既存の後期資本主義諸国の両方の問題点を同時に批判的にとらえ返そうという、いわば原理論的な視座が田中先生の著作の通奏低音として流れています。その上にいわば万華鏡的な非常にたくさんの論点が提示されていて、万華鏡的な論点の提示だけに全部まともにいちいち理

解しようとするとなかなか難しくなってしまうのですが、根本の問題関心というのを理解することが非常に大事です。

根本の問題関心という点では10年ぐらい世代は違うのですが、私個人としては非常に共鳴するところがあります。ただ、議論の展開の仕方が物象化論的なものをマルクスからどうくみ取るか、そのくみ取り方には実にいろいろな回路があるものだと思います。私は廣松渉さんとか、真木悠介さんの物象化論解釈の延長上に社会学的な概念構築を試みっていますが、田中先生の物象化論的理解とはやや違った角度ですけれども、いろいろな物象化論の展開の仕方があって、それは今日でも押さえておくべき基本的問題なのだろうと。そういうことを特に田中先生の初期のお仕事に感じる、それが最大の論点だろうと思っています。

藤 田 ありがとうございます。宮島先生と船橋先生からご提起いただいたことは、かなり共通した問題点の指摘をされていると思うのですが、人間的自然の、根本に提示されている問題関心自体の所在をご提起いただいたと思います。田中先生、そのあたりについて初発の田中理論の基底についてお話しいただければと思います。

田 中 私の若い頃、つまりオックスフォードから帰ってくる前の、まだいろいろなことを悪戦苦闘している時期のある種の全体像が見えてきたというか、ご紹介いただいたと思います。今の船橋さんのお話と絡めて言いますと、やはり我々にとっては福武直さん、日高六郎さんのあの社会学は非常に大きかったです。船橋さんが言われた戦後の民主化過程がまだ終わっていないところに、すぐ後から産業化の過程で富永健一さんたちの社会学が前面に出てくるわけです。その直前で、まだ富永さんが専任講師になるかならないかという状況で、我々は戦後の歴史過程の民主化過程とリンクしながら考えていたと言ってもいいです。それは福武直、日高六郎というお2人の社会学が非常に魅力的だったということがあるでしょう。

おそらく船橋さんは福武さんの地域社会学の手法もかなり取り込んで、現在の仕事につないでいらっしやると思うけれども、宮島さんと私なんかはかなり日高さんの線から吸収したものが大きいと思います。もう少し我々の世代に引き付けて言うと、その前提で折原浩さんと真木悠介（見田宗介）さんの2人との関係も非常に大きいです。マルクスとウェーバーという話がありましたが、いみじくもウェーバー生誕100周年の記念シンポジウムが、我々の大学院修士ぐらいですか。

宮 島 64年ぐらいですか。

田 中 あれがいわば日本のウェーバー研究の集大成を目の前に見せられたような感じでした。今になるとはっきりとは覚えていないのですが、学部の最後か、大学院生の頃か、とある研究会で、宮島さんが三木清をやって、僕が戸坂潤をやってなんていうそういう場がありましたね。

宮 島 そうですか。僕は忘れまして（笑）。

田 中 記憶のはるかかなたで、またちゃんと調べなければいけないのですが、背景としては学生社会学会というのが東京近辺で始まって、その動きを背景にしながら、東大だけではなくてほかの大学の学生もいましたね。なぜか、宮島さんが三木清で、僕が戸坂潤だった。戸坂潤を担当して『科学方法論』や『科学論』を読んだというのはその後の僕の社会学の勉強に非常に有益と



宮島 喬
法政大学 大学院教授

いうか、大きく効いています。それからもう1つ付け加えるのは、なぜかあの頃はほかの大学の大学院生たちとの交流が非常に盛んで、最初は東北大とでしたか。

宮島 そうですね。

田中 東北大の細谷昂さんと東大の折原浩さんが仲が良く、その2人のアレンジメントで院生同士で、我々が仙台に乗り込んだんですね。その後も余韻嫋々のようないい議論ができました。その翌年に今度は京都でやりました。これが今に至るまでの井上俊さんとか、立命館の清野正義さんとか、同年配の人たちの交流の始まりでした。

宮島 1つだけ田中さんの感想も聞きたいのだけれど、あの頃マルクス主義を通して高度成長期の日本の社会のさまざまな問題をとらえよう、分析しようという思考が強くあったと思うのだけれども、同時に近代主義も魅力をもっていた

時代ではないでしょうか。関東社会学会の大会で日高六郎氏がたぶんプロデュースもされ、司会をし、石田雄さんや伊東光晴さんなどが登壇されました。お二人ともかなりラジカルな近代主義者です。日高さんはそのことを戦略として意図されてやった。マルクス主義と近代主義がどのように接点が見いだせるのか、日高さんはそれを考えているのだろうと思いつつ、だいぶ刺激を受けました。石田雄さんは報告に立って、パーソンズの普遍主義の意義についてだけ話し、降壇されました。

田中 私は日高六郎という人が『近代文学』の同人だったということもあって、今おっしゃった3人の方よりももう1つ上の世代の荒正人さんとか、平野謙さんとか、埴谷雄高さんとか、そういうところと、それから『近代文学』とは違うけれども、やはり日本の近代化イコールその段階の民主化について、マルクス主義ではない、そういう意味では近代社会科学のほうからアプローチしていた丸山眞男さんとか、大内力さんとか、大内力さんは特に福武直さんと大変仲が良かったわけですが、そういう流れの中に清水幾太郎さんも加わって、特に清水幾太郎さん、日高六郎さんという線が重なって入ってくるというところです。清水さんの場合には人間的・自然的諸力にあたるものをプラグマティズムから引き継いでいったわけです。清水さんはあれだけ多面的な人ですから、宮島さんが研究分担をしていた三木清とつながる線もあるわけで、これはまた別の機会に議論するところではあります。

もう1つ船橋さんが触れたことでいいますと、私は『思想』に修士論文のエッセンスを発表したら、それに真っ先に注目してくれたのは廣松さんです。いきなり電話してきて『東京大学新聞』に社会科学方法論の論考を書けと言うのです。おそろおそろ書いたのですが、今は手元ないので何とか発掘して調べ上げたいと思いますけれども、戸坂潤を研究分担していたということもあって、戦後の新しいかたちの唯物論研究会の活動とそこでつながります。廣松さんから物象化論の話その後吸収する1つのきっかけはそこにあったと思うのです。

もう一言だけ言っておくと、僕は本郷に来て3年生のときに城塚登さんのフォイエルバッハの講義を聞いて、この講義からかなり影響を受けていると思います。先ほど来出ている人間的・自然的諸力は僕の場合にはフォイエルバッハと初期マルクスにつながるころはたぶん1つの根っこなのでしょう。

70年代の田中先生の社会学と市ヶ谷時代の田中ゼミ，法政大学社会学部

藤田 ありがとうございます。まだ初期のいろいろな著作について語りたいたくさんあるのですが、今ご発言された方も後でまた介入していただくとして、少し時代を下って若い世代の社会学者の人たちにご発言いただきます。市ヶ谷の田中ゼミ時代に伊藤守さんと小林直毅さんは、教師と学生というかたちで受け止めた時代になると思います。今までのお話を聞いていて、あらためてその時代に田中先生の著作に触れられた学生時代のことを少し思い出していただいて、どのように総括されているかということですが。



藤田真文
法政大学 社会学部教授

小林 僕は1975年に田中ゼミに所属するようになりました。ちょうど学部で2年のときでした。法政大学の社会学部にはいくつも社会学の、特に理論的な研究を展開しているゼミがあったのですが、その中で田中ゼミに入って学部の2年生で最初にテキストとして何を読んだかということ、ホップズの『リヴァイアサン』だったのです。『リヴァイアサン』を読みながらそこでゼミ生は何を学んだかということ、先ほどお話が出たまさに人間的・自然的です。市民社会の成立期の思想の中で、一体どのように人間的・自然的というのをとらえていくのかということ、二十歳そこそこの学生が勉強するという機会だったのです。

その翌年、3年生のゼミになると、ちょうどミッツマンの*The Iron Cage: An Historical Interpretation of Max Weber*の翻訳『鉄の檻—マックス・ウェーバー—一つの間劇』が出たということ、高島善哉さんの『マルクスとウェーバー』が刊行されたという流れの中で、マックス・ウェーバーの「客観性論文」と『支配の諸類型』を勉強しました。さらに4年生のときには伊藤さんもゼミに所属していたのですが、確か大学院も一緒にやっていました。前期にテンニエスの『ゲマインシャフトとゼメルシャフト—純粹社会学の基本概念』で、ちょうど真木悠介さんの『現代社会の存立構造』が刊行された時期でしたので、夏合宿にはなんと『経済学批判要綱（グルントリッセ）』を学部の2年生からマスターの2年生まで一緒にやるという、そんな勉強の仕方だったことを今思い出していたのです。

今先生方がお話になったことが、僕たちの学部の頃の3年間にほとんど集約的にゼミの研究課

題として盛り込まれていました。そんな雰囲気の中で育ったのだということを今のお話であらためて確認しました。70年代半ばから後半の社会学，社会科学というのはそういうホットな状況にあって，そういう中で学部学生として勉強したというのは歴史的には非常に重要だし，幸せな状況だったのかなという気がします。

伊藤 私は学部では小林さんより1年下で入りました。学部の2年の時に，最初に高島善哉さんの『マルクスとウェーバー』を読んでスタートした。先ほど船橋先生から少し大きなお話があったと思うのですが，今振り返ると私は75年に入学なのですけれども，たぶんほかの大学の社会学と少し違いがあったという気がしています。大学紛争が最後まで残っていたという影響もあるのか，法政の中ではまだ「マルクスとウェーバー」という基軸が，私が入った70年代後半も随分生きていて，そこで鍛えられたという印象があります。

ただ先ほども名前が挙がりましたが，廣松さんが法政で講義をされていて，私も受講しましたが，非常におもしろく，雑談か，お笑いのような，実は中身は非常に濃かったですけれども，物象化論を話されていた。また私が学部の時は丸山圭三郎さんの仕事も非常に大きなインパクトがあって，この廣松さんと丸山さんに代表されるように，社会学が社会学で閉じないでどう開いていくか，ほかの分野の学問とどう接点を持っていくかということも，70年代の後半の社会学の一つの局面であった気がするのです。

僕が田中ゼミに入ったのはその点が大きい。メルロ＝ポンティ，ソシュールを含め，社会学をもう1回革新していくときに諸科学とどう結びついて水準を作っていくのか。私にとって田中先生は社会学者というより，社会学者なのか何なのかよくわからない存在で…（笑）。もう少し広いコンテキストでとらえないと理解できない先生の位置が魅力だったような気がするのです。

ただ最初の話に戻りますが，大学院の頃に，橋爪大三郎さんの言語論グループ研究会があって，その上の世代の人たちと話すとは完全にポスト構造主義で，僕が学部で学んだときの「マルクス・ウェーバー」問題との落差をものすごく感じた。こちらが遅れているという感じではなく，東京の同じ社会学の大学院であっても時代認識の差を非常に感じましたし，逆にそこで「マルクスとウェーバー」という大きな軸をどこかで継承して，次につなげていく役割が法政の社会学の中にあるのではないか，という気持ちで大学院の生活を送ったという感じがします。

田中 二人とゼミで接した頃は怖い先生だったと思うのです。いきなり絞りに絞るようなゼミをたぶんやっていたと思うのです。それはいろいろな事情があって，1つは76年に僕は学部の副主任で，しかも多摩の比較的平静なところではなく市ヶ谷での副主任ですから大変な緊張状態でした。社会学部に「社会問題総論」なんていう授業があるものですから，待ってましたと学生が来るわけです。僕は36歳で76年に副主任をやっていると，そういう学生が大勢集まっている授業に，副主任はどんな状態なのか，斥候のように見に行かないといけないわけです。そして，ある日，今でもある建物の541教室か何かに飛び込んだらすごいことになっているのです。いろいろな色のヘルメットがまだあって，まるで糾弾集会みたいな感じです。そういう二重三重の意味でホットな場面で，副主任の役目をやりながら「はい。3時10分になりました。ちょっとゼミに行きま

す」になるわけです。そういうホットな中で議論していたということがあります。

今お二人から出てきた話とリンクしていうと、もう1つはちょうどこの頃『展望』に掲載していたものが『私生活主義批判』になって、それをもとにして見田さんと私を早稲田の政経学部にある考究会という学生団体が呼んでくれたのです。それで真木悠介と私が話に行ったわけです。これがしっちゃかめっちゃかでえらい長時間になってしまって、藤原保信さんまで同席していてニコニコ笑いながら聞いているわけです。齋藤純一君なんかは学部の4年生か、マスターに入ったかどうかです。非常に大きな団体で90人~100人ぐらいの学生が、院生も含めて来ているわけです。そうした諸君と議論しているわけですが、果てしなく続いて終わらないのです。夜9時過ぎになってもまだ終わらない。「僕らはおながすいたよ、何とかしてくれ」ということで、藤原保信さんがやっと外のお寿司屋に連れていってくれたのです。そういう事柄とまたリンクして、小林さんと伊藤さんのゼミに持ち帰ったということがあったかもしれません。

僕にとっては非常に難しい局面に対処させられながらの時代でした。私は割と『展望』という雑誌が好きなのです。今でも復刊されるといいなと思っているのですけれども、あれは非常に人間的な要素の濃い総合雑誌です。『展望』とつながるようなかっこうで、この頃からでしょうね、大岡昇平という人に関心を持つようになったのは。そんなことを二人の話をつなげて理解しました。

藤田 今、伊藤さんが法政の社会学と、接点があった橋爪さんたちとの違い目のような結構本質的な話があったと思うのです。ただ一方においてそういう議論ができるのも、田中先生がむしろ記号論的なものにこの頃から議論を開かれていたということが、非常に大きなことだと思うのです。それで、社会学の中に記号論的なもの、ソシユールのな理論を包摂するということは、今だったらそれは理解できるとして、70年代中盤の文脈でそれをされたというのはどういうことなのかということも含めて考えてみたいです。

僕が院生の頃に『社会意識の理論』を自分の研究の参考にしようと思ったのも、その記号論的なアプローチというのが非常に新鮮に思えたからだと思うのです。学部生から院生になりたての頃でしたし、そういうことを指導してくれる先生もいなくて、独学でやっていたものですから、周りを見回してそういうように理論構成するという議論は非常に新鮮でした。伊藤さん、小林さんそのあたりはどのように感じられていますか。

伊藤 象徴的でした。学部的时候に高島さんの本から入って大学院に入ったときに、最初にロッシの『弁証法的構造社会学の探究－象徴社会学から記号社会学へ』という本を読んだのです。その4年の間に記号論と構造主義とポスト構造主義の問題というのが、僕の中にも入ってきたという印象がすごくあります。

小林 僕の場合は特に学部の2年生の頃なのですけれども、まだ疎外論に対してある種の愛着を持っている当時の社会学部の学生は多かったのです。疎外論的なアプローチというのは乱暴な言い方をしますと、人間論的なところに親和性を持つのですけれども、ただ田中ゼミの中では疎外論にどっぷりつきりきったまま何かそこでマルクス主義的なアプローチを学ぶとか、そういうことがむしろ少なかったです。僕の同期の学生を見ていると、むしろ物象化論に対するアプローチが非常

に強かったりとか、あるいは歴史理論、市民社会論から社会主義論へ展開していくような流れの中でマルクス主義を勉強しようとするような、そういうゼミ生が多かったです。

そういう立ち位置に立つと、半ば必然的に言語や記号の問題に入っていくのが得ない、そういう流れが田中ゼミの中ではおのずとできあがっていたような印象が強かったです。ですから、4年生になって卒業論文を書くときには、田中ゼミの中で勉強してきたにもかかわらず、マルクス主義的な社会学をメインテーマにして卒業論文を書くのではなく、むしろシンボリック相互作用論とか、現象学的社会学とか、僕なんかはデュルケームで書いたりしていました。そういう非常に多様な展開と一言でくくってしまうのももったいないような、学問的な広がりというか、そういうものが田中ゼミの中にあったという気がします。

田中 先ほど宮島さんがおっしゃった話とつながるのだと思うのですけれども、具体的にいうと石田雄さんはパーソンズの話だけをなさって……。

宮島 いわゆる行為の型の変数の中の「普遍主義（ユニバーサリズム）」が、いかに意義があるかということ。

田中 その話と非常にコントラストがあると思うのです。私は卒業論文がマートンで、修士論文の段階でかなりパーソンズ批判を心がけているわけです。パーソンズの行為論を見ていくと、まず記号論的な側面が完ぺきに落ちているわけです。これは『思想』の論文の中にも修士論文のエッセンスですから載っているのですけれども、認識、行為、パーソナリティというトリアーデで人間をとらえると、これが具体的な歴史の展開、運動の中で理論、実践、思想主体になるというプログラムを出しているわけです。

認識、行為、パーソナリティをそれぞれ検討するときに、行為論のところではパーソンズの *The Structure of Social Action* を批判的に読み込むという作業をやりました。認識のところでは先ほどの船橋さんの話と絡むのです。東ヨーロッパのピロード革命の展開と併せて、僕はあそこではアダム・シャフの記号論をやっているのです。今はバウマンの議論がいろいろありますが、僕にとってはバウマンの議論は非常に緩くて、どちらかという疎外論に近い格好にあのときには受け止められていて、むしろアダム・シャフの意味論、記号論のほうがはるかに僕らにとって魅力的でした。チェコその他、同じ構造主義的に見える、構造という言葉もあるのですけれども、いわゆる構造主義の記号論とはだいぶ違うのです。

同時にザクレブで出していた『プラクシス』という雑誌によって、後にそれぞれのところで民主化を進めていく人たちの議論が私にかなり影響を及ぼしていたものですから、そこで僕の行為論の中では最初から労働とコミュニケーション行為の統合が必要だという素地がありました。いずれはそこに行きたいと思いながら記号論を入れていたということです。

宮島 田中さんが労働過程とコミュニケーションの関連や如何、ということはずっと考えてこられたというのは、書かれたものを通し私も感じていました。お話を伺うと、15歳のときから労働の経験をお持ちだと。そういうものを通して自分の生活をつくってきたという意識があって、すると労働というものが持っている意味が私などとは違うのだろうと、今にして思います。またコミ

コミュニケーションに対する田中さんの意味付与に関して、できればお聞きしたいが、単なる伝達ではなく、認識の発展とか、深化ということだろうと思うのです。とすると、理論的にはどういう人を通して認識あるいは精神発達としてのコミュニケーションという考え方を取り込んでこられたのか。

田中 これは私にとって大変恵まれた出会いがあって、1971年に法政大学社会学部専任講師として来るわけです。そこに芝田進午という人がおられて、彼が『現代の精神的労働』なんてやっていたわけです。ですから、かなり芝田進午さんからの触発されるものがありました。同時に考えてみれば、新聞研究所には4年間しかいなかったのですけれども、新聞研究所で得たものがものすごく多かったです。日高六郎さんは当然ですけれども、稲葉三千男さんから吸収させていただいたものがたくさんあったし、不思議なことに稲葉さんは後で出てくる小川文弥さんと同じ大学で同僚になるわけです。偶然ではあるのですけれども、不思議な巡り合わせです。

あの時代は全体としてみんな貧しい学生時代だったのですけれども、学部時代、院生時代にとりわけ貧しかったのは見田宗介さんと私なのです。正門前の彼の下宿に呼んでくれたのですけれども、四畳半の畳の部屋でしたけれど、本はたくさんあるけど本しかないというような。あとは元島邦夫さんぐらいですか。この3人が一番貧しかったと思います。新聞研究所の助手になったら稲葉三千男がさらに輪をかけて貧しい学生時代でした。稲葉三千男という人は非常に僕をかわいがってくれて「田中君ね、バイトはしなければいけないけれど、バイトをしすぎちゃだめだぞ」ということをいつも言ってくれていました。

そういう背景で芝田進午さんのあえて言えばマルクス主義的なコミュニケーション論と、稲葉三千男さんのもう少し広いコミュニケーション論とが僕の中に両方入ってきて、同時にどう考えてみてもアメリカのクラッパー型の効果研究みたいなコミュニケーション論ではだめだという素地になっていったのでしょうか。これが後にイギリスのマクウェールたち、あるいはリーズ大学の研究グループたちの「利用と満足」研究とつながり、さらにもう1つ小川先生と大変奇跡的に巡り会うという背景の中で、コミュニケーションへのアプローチが萌芽的にあったのでしょうか。

藤田 今のお話は後半につながるようなところをご提示いただいたと思います。先ほどの繰り返しになるのですけれども、『社会意識の理論』の中の理論的分析と歴史的分析の内的な統一というのは田中先生の社会学の根幹を成していると思っているのです。それとさっきのソシュールとの関係でいうと、『社会意識の理論』で、「社会意識分析の方法論的な視座の両契機の統一はその認識論的存在論的基礎の理論的一貫性の有無を考えてみれば、直ちに判明するように実体概念でなければいけない」とおっしゃっているのです。社会意識を実体概念としてとらえるという考え方は記号論的な発想というのがないと、ある意味で成り立たないようなことです。実体概念で意識をとらえているというあたりは、あらためて読んでみて70年代という時代に果たして社会学全体の質から見て、まったく当然のことだったのか、まったく新しいことだったのかという文脈がわからないものですから。

伊藤さんも小林さんもその現場にいらっしゃって、今あらためて考えてみてどうですか。社会意識、記号論的なものも含めて実体概念としてとらえていくというのは、田中先生の社会学の根幹に

ある概念と歴史というのをまさしくリンクさせて考えていくという方法論です。このへんについて学部生時代、あるいは院生時代にどのようにとらえられていましたか。

伊藤 難しい問題です。1つ言えるのは、パーソンズの体系化、大きな理論構築という営みがまだ社会学の中に生きている時代の中で、田中先生はパーソンズに対する批判が強いとはいえ、かなりパーソンズ的で、概念構築の志向性が強い。概念構築性という点と、歴史性をアクチュアリティと読み替えてもよいと思いますが、両者は二律背反することがある。しかし特定の時代状況の中で、読み手側が概念構築された理論の中に「理論のアクチュアリティ」を感受することはあったように思うのです。

それが我々の世代にとって「社会学のリアリティ」を喚起させてくれる大きな要素だったのではないかと思います。先生の本には、歴史的な個々の事例に関して触れている文章が非常に多い。先ほど舩橋先生が言われたプラハの問題も本の中に出てきています。理論書ではあるけれど、現代を読み解いていく1つの指針があった。概念と歴史が、どこかで田中先生の中で結びついていたという感じがします。

小林 それが田中先生の著作の域を超えて展開し出したというのは、むしろオックスフォードから帰られてからのような、少なくとも僕が見るとそういう感じが強いです。80年代の法政大学の社会学部の中でとか、あるいはその後、それこそ歴史的分析ということで、この間なさってきたメディアの中でも特にテレビとか、そういう研究の中で展開され始めた。少なくとも僕たちが修士課程の頃まではなかなかそれをアクチュアルに経験するということが少なかったです。

伊藤 せっかくの機会なので、田中先生にぜひお聞きしたいと思っていたのですが、オックスフォードから帰られた80年に『権威主義的パーソナリティ』を訳されて、80年代でいうと編著で『社会学事典』がありますけれども、単著としては90年の『行為・関係の理論－現代社会と意味の胎生』まで、変な言い方ですけど「空白の時期がある」と私には思えるのです。ご自身が『行為・関係の理論』で自覚的に書かずに来た、書かないで来たということをきちんと書いておられるのです。

今、藤田さんが話された理論と歴史、あるいは理論と時代との格闘というか、そういう点で見たときに、80年代の田中先生の中に何があったのか。何を考えて書かないというスタンスになったのか。80年代の空白の時期を経て、90年代に先生の中で何が変わってきたのか。そこらへんをお聞きすると藤田さんの問題提起にも少し答えることができるかと思うのです。

田中 さすがですね。若手3人が突いてこられたところはやはりポイントだと思います。この3人を若手と言うのは大変申し訳ありません、この中ではということですが。非常に単純な事実を申しますと、宮島さんは1940年生まれ？

宮島 そうです。

田中 僕も1940年なのですけれども、あの年は皇紀2600年なのです。神武天皇から2600年かということで、1940年と皇紀2600年が重なっているけれども違う、これ自体がもう歴史的なことです。それから、僕の研究を始めていく出発点はイデオロギー論だったということが、たぶん藤田

さんの問いかけに対する1つのヒントになるのでしょうか。それに補助線を引くと、実は僕は駒場の2年間は地文研究会というサークルに入っていました。これは要するに人文地理なのです。デヴィッド・ハーヴェイとか、ギデンズもよく使いますけれども、タイム・スペースということであろう、僕の場合には天文、人文、地文という、天文学、人文科学、そして地文学、地質と地理ということなのですけれども、その中のかろうじて人文地理でやや社会学と接点があるようなところですよ。デヴィッド・ハーヴェイの本は非常に親近感を持ってずっと読めました。そういうような背景があったということです。

それから、実体概念と関係概念についてはカッシーラーと悪戦苦闘していたということが非常に大きいと思います。『社会関係の理論』になりますとカッシーラーは前面に出てきましたけれども。この当時は実体概念ということをもむしろポジティブに言っているわけで、後に伊藤さんが質問されているようなあたりで実体を関係のアンサンブルに組み換えていく、そういう作業が始まっているのだと思うのです。これは結構時間がかかったということがあります。

3点目は80年代前半というのは船橋さんの話につながると思うけれども、84年が多摩移転ですから、84年の多摩移転は結果であって、その前に教学改革が佳境に入ってくるというそれこそタイムリミットの中で具体化する。76年、36歳のときに副主任をやってそのご褒美で38歳からオックスフォードに行ったわけです。39歳の秋に帰ってきて、そしてそのあたりで教授会の中では船橋さんたちと一緒に教学改革に取り組んで多摩に移ります。市ヶ谷で13年、多摩で26年のちょうど境目のところに入ってくるわけです。

それから、ちょうどオックスフォードから帰ってきた39歳の秋に、まさに小川文弥先生との出会いがありました。そして後半のマスコミ研究の全面展開につながっていくという過程です。まだ伊藤さんの質問に全面的に答えきっていないわけではないけれども、80年代にブランクがあるのはそれかな。それともゴルフと山歩きに時間をかけすぎたのかな（笑）。

社会学部の教学改革と多摩移転

藤田 今お話しになった多摩移転以降の社会学部の教学改革、特に社会学を学部の中でどのように教育しようとしてきたかということでお話しいただきたいと思います。おそらく教育の体系と社会学のありようというのがリンクしていると思うのです。その時代時代で社会学をどう教えていくかということについて、大学教員としては自分の研究と教育をある程度結びつけて考えざるを得ないというところがあると思うのです。この多摩移転当時、社会学部の教学改革はどのように構想されていて、社会学に何が起きていたかとか、そのあたりを船橋先生からお話しいただきますでしょうか。

船橋 詳しく話すと限りなく話があるのですが（笑）、なるべく要点を絞って言います。私は79年4月に法政大学の社会学部に専任講師として着任しました。その半年後に田中先生がオックスフォードから帰ってこられました。私は学部、大学院、助手とずっと国立大学にいましたので、



舩橋晴俊
法政大学 社会学部教授

率直に言って私立大学である法政大学に来たときにはさまざまなカルチャーショックがありました。私立大学というのは大変だなと本当にそう思いました。端的に言えば、教員と学生比が数倍違う、それはどこもそうなのですが、特に法政については要するに文部省の設置基準を満たしていない中で市ヶ谷でやっているという信じがたい話なのです。要するに法令違反を何年も何年もやっていて（笑）、それでどうしようもないと。形式的にはそうですけど、実体的に

はまさにマスソサイエティという、これこそ田中先生が最も批判している社会関係の実態、それが当時の法政大学全体のように感じました。

それはとにかくカルチャーショックがすごくあって、このままでいいのかという疑問があった。そのようなことはみなさん思ったのです。もちろん先輩の世代もずっと思っていて、早くは60年代の後半ぐらいから多摩移転の構想はあったのです。それが紆余曲折してなかなかまとまらず、ようやく80年代に入ってから本当に具体化するという気運が出てきたわけです。当時は中村哲総長、それから増島宏常務理事の2人を軸として、増島理事を出している社会学部としては田沼肇学部長、石川淳志主任とか、そのへんの方を軸に総体としては社会学部は多摩移転を向いていたと思います。

ただ、当時の社会学部の教員の意識としては、私の大ざっぱな理解では、どちらかというとな配の方々にはまだ慎重論がかなりありました。それから、30歳代、私はその一番若い世代でしたけれども「多摩だ、多摩だ」と非常に積極的な姿勢が強かったです。中間の40歳代がある種のイニシアチブというか、その帰趨が学部を選択に大きく影響する状況だったと思います。端的には田中先生には40歳代の教員として、80～83年あたりにカリキュラム改革の小委員会の責任者を引き受けていただきました。学部教育委員会という名称で、発足は、1981年12月です。石川先生が執行部をやって、田沼・石川執行部のもとで改革小委員会を作ったわけです。

当時は応用経済学科と社会学科という2学科制で、応用経済学科からは相田利雄先生と岡本義行先生、社会学科からは田中先生と私と、その4人の小委員会で抜本的なカリキュラム改革に取り組もうということで発足しました。合宿をやったり、非常にインテンシブに議論をしました。事務方では門崎さんが主任をやっていらして、かんかんがくがくの議論を延々とやりました。それで当時の石川主任の言葉を借りれば新しい学部を作るぐらいの作業であるということで、労力的にも大変だったと思います。

市ヶ谷時代は横割りのカリキュラム体系です。部分的な修正はありますけれども基本的には1，2年生は第1教養部，第2教養部の教授会が，3，4年生が専門学部としての社会学部教授会がカリキュラムと教育に責任を持つという横割り型の体系でした。多摩移転に関しては4年間一貫教育

という、いわゆる縦割り型の体系に変えていくというのがまず大きな骨格なのです。それから学部専用棟を作る。いろいろな要素があって、基礎演習を1年生からやるとか、何よりも大きいのは5コース制を採用したということです。今で言うファカルティ・ディベロップメントの先駆的取り組みだったと言えるのではないかと。小委員会の中では他の3人は全員30代で、田中先生のみが40代だったと思います。その田中委員会の答申が、大局的には教授会で受け入れられて多摩移転につながっていった。

そのときの考え方でどういう変化があったかという、社会学と経済学の「原論」の必修をなくしたということがまず1つ大きいです。それから、5コース制を取り入れたことです。2つの学科の垣根を取っ払ってしまおうと。ある意味で学生の自由選択制に非常に信頼を置くような構造のカリキュラムです。かつコース制を取り入れて応用経済学科、社会学科という伝統的な2分は教員組織としては残すけれども、学生のカリキュラム体系においては必ずしもそれを前面に出さない。むしろ両学科横断的な5コース制を取り入れる。これについては賛否両論いろいろあったのですが、結局は田中委員会の答申どおり、構想どおりに実現していった。

その背景にあるのは少なくとも応用経済学科からいえば、マルクス経済学を基本にした社会政策を打ち出していくという大きな枠組みが、客観的に力を失っていったという実態はあったと思います。それから他方で国際化、情報化という現代社会の大きな変化があって、そのファクターを反映させないと学生に対して魅力のある体系にならないだろうと。それで、そのとき国際社会コースを初めて取り入れましたし、もともと社会学科はメディア系に魅力的な先生が何人もいらして学生の人気も高かったので情報コミュニケーション・コースというのも入れた。

そこには空間的な移動だとか、建物の施設が変わったということではなくて、カリキュラムの内容をいわば全体としての時代状況なり、学問動向に沿うようなかたちで大胆に組み換えたという意味があったのではないかと思います。田中先生の委員会で私もずっとやっていて、これはやはり忘れがたき思い出です。いろいろな議論を遠慮無くさせてもらいました。

藤田 今お話いただいた「原論」をなくすとか、学科の垣根をなくして、5コース制にして情報化、国際化というものを社会学の教育の中に取り入れていく、現在まで続く社会学部の知のあり方の体系だと思うのですが、田中先生、この当時どういうことをお考えになってカリキュラム改革をされていたのでしょうか。

田中 例えば市ヶ谷キャンパスの教授室を中村哲さんは銭湯と呼んでいました。銭湯にみんなで入るんだからいいではないか、裸の付き合いができるからいいのだと。確かにそこに木田元さんみたいに非常勤で教えにきてくれた方や、僕が非常に印象深く覚えているのは亡くなった小田実さんが英文科の非常勤講師で来ていて、あの独特のスタイルで隅っこで下調べをしている。それが全部見える。中村哲さんたちの発想だとみんながごちゃごちゃいることにいいところがあるのだと、そういうよさはあって、これも一理あるのです。

けれども、もう少しまじめに社会学部の研究、教育の進展を考えることになるちょっと無理だ。ちょうどその過程で、市ヶ谷で現在図書館が入っている80年館という建物ができたのです。その

図書館の上に最初は社会学部が入ろうではないかと、それが比較的年配の方の慎重論でした。何もあんな遠い多摩に行くことはない。しかし、栢野晴夫さんのように、シニアクラスの中にもあちらに行かなければだめだという方々もおられて、多摩に踏み切ることになっていったわけです。結果的には国際化、情報化、そして高齢社会化、今はそれに少子化がつながっているわけですが、この3つの外的環境の変化へ対応した縦割り4年一貫教育をするためには、多摩に移転したことは成功だったと思います。そのことによって3コース、最初は地域と福祉、産業と労働、社会と文化という非常にプリミティブな発想からカリキュラムを考えて、それでも2学科しかない状況を超える最初のステップだった。それを今申し上げた3つの外的環境の要因みたいなことと対応させる中で、国際化への対応で国際社会が入ってきた。というようなことで、5コースでスタートしたわけです。もう少し素朴にいうと、教養部で2年間やって終わりの2年だけ市ヶ谷で社会学部の専門教育をやるというのでは、理論と実証の両方を教えるわけにいかないわけです。「社会調査法」の授業なんかはどうしても片手間でほんの少し教えただけです。そういうところが石川淳志先生なんかにもあったと思います。

多摩に行ってから4年一貫教育のメリットが非常によく生かせるような格好で、現在の船橋さん中心の理論と実証を中心にした教育体制が取れるようになった。80年館ができて、研究室が2人1部屋に少し改善されたといった状況です。教育技術研究会というのもありました。これがファカルティ・ディベロップメントのはしりみたいなものになっていったのでしょうか。

社会学の教育の中身にどうリンクしていたかという、これはまだきちんとした総括はできていませんけれども、まずマートン型の中範囲の理論のスタイルに近い4年一貫教育の体制が取れた。現在3学科になっていますけれども、3学科のそれぞれに対応するところまで来ていると思います。もう1つは情報処理教育、最近は処理が取れて情報教育ということですが、これも比較的いろいろなことが言えるでしょうけれども、小林さんが来て、土橋臣吾さんも入ってということの中でまあ体制は作れています。たぶん一番課題が残っているのは語学力を向上させて、4年間で語学教育をちゃんとやってそれにうまくリンクした格好で大学院教育を充実させる。これはまだうまくいっているとは言えません。これは宮島さんからコメントをいただいたほうがいいです。

藤田 宮島先生、80年前後の社会学における教育のあり方についてどのようにお考えでしたか。

宮島 法政大学が一部多摩に移ったことは、大きな英断だったと思います。ただ、大学院の授業運営はなかなか難しいと感じます。大学院教育というのは広い校地を必要とするものではなく、利便性の高い、集まりやすい、知的コミュニティを作りやすい場所でのいいわけですから、やはり市ヶ谷と多摩と楢原のように2つの場があって、通学時間が長いと大学院教育をどうやっていくか。1つの課題だと思います。

藤田 これは宮島先生のテーマに関連するのですが、国際化が社会学の中で前面化してくるといのは80年前後の現象なのですか。どうなのでしょう。

宮島 いや、むしろ社会学自体が国際化してくるのはもう少し後ではないですか。いつということは言えませんが、80年代後半でしょうか。ベルリンの壁の崩壊が89年ですが、その頃からは

グローバリゼーションが次第に大きな課題になってきて、国際化よりはむしろグローバリゼーションが言われますね。1990年に入管法改正が施行され、外国人がぐっと増え、日系ブラジル人がやってくる。90年代の前半が日本の多文化化の進行の時期なのです。それは必然的に、具体的には社会学に影響を与えるわけで、家族の研究をしていた人たちにとって、国際結婚が今20組に1組だという現象が起きる。都市研究や教育の研究でもそうです。ただ、それに先だって80年代後半には準備されていた。

田中 対応としては早かった。

宮島 それはそうですね。

船橋 国際文化学部が1999年に開設されますけれども、その十数年前に社会学部が一番先これをやって、ある意味でその実績を見て本学にも国際文化学部をつくっていかうというような一種の先駆けになったのかという感じもします。それから、多摩移転の頃は教員陣もそうそうたる方がいらっちゃって、稲上毅先生は後に東大で文学部長をなさいましたし、それから、秋から日本社会学会の会長になりました矢澤修次郎先生、そういう方が助教授クラスでぞろぞろいたという信じてたい豪華な陣容でした。それで多摩移転にみんなで取り組んだ。

それから、学生生活全体をどう再構築していくかという側面もあって、そういう面では石坂悦男先生、壽福眞美先生なんかはすごく苦労されました。石坂先生や壽福先生が努力されていた側面なしにはカリキュラムもうまくはできなかったと思います。そういう意味ではそのときに社会学部の総合力がすごく発揮されたと思われます。それから、外国語についても今論点が出ましたけれども、そのときからネイティブスピーカーの授業を大胆に取り入れたのです。多摩移転を契機に高尾利数先生や加太宏邦先生なんか社会学部に来てくださって、その人脈で有力なネイティブな方を大幅に増やして、その成果もいろいろ出たのではないかと思います。

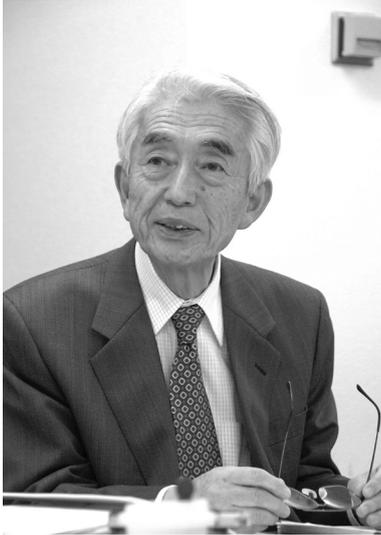
藤田 ありがとうございます。前半の時間が来まして、多摩移転ぐらいままで来ましたので、後半はマス・コミュニケーション研究を中心に話を始めて、90年代、2000年代の田中先生の業績ということについてお話ししたいと思います。

(暫時休憩)

コミュニケーション研究としてのテレビ視聴研究の展開

藤田 後半はマス・コミュニケーション研究における田中先生の業績についてお話を進めたいと思います。そのときに欠かせないのはテレビ視聴研究と考えられます。田中先生とともにテレビ視聴研究のプロジェクトを推進されてきた小川先生から理論的な背景と経緯を少しお話しただけだと思います。

小川 我々が調査を考えるときはただ単に調査をするだけではなく、その背景にやはり理論的なものが必要ではないかということはみんな考えていると思います。それが私の場合にはたまたま「受け手」という言い方をしているけれども、やはりもう少し人間としてのコミュニケーションと



小川文弥
東京国際大学 名誉教授

うか、そういうものが私にとってのキーワードだったわけです。

といいますのは、卒論で対人コミュニケーションを中心に
してマスコミの効果を扱いました。その当時はマスメディア
からの一方的な情報というものが支配的であるという流れが
あったわけですが、どうもそれだけではないのではないかと
考えたときに、カッツとラザースフェルドの*Personal
Influence*を、たまたま私の卒論の指導をしてくださった田原
音和先生から「君、おもしろいからこれを読んでみないか」
と言われたのが、そこに入ったきっかけでした。

私自身は放送文化研究所で、いわゆるマスコミの研究をや
りたいと思っていたのですけれども、NHKに入局して、最
初は秋田放送局で5年間番組制作を体験しました。そして東
京オリンピックの翌年の1965年に、新設の世論調査所に転

勤になったわけです。

そこですぐに何か研究的なことができるかと思ったら、とにかく担当したことは視聴率調査であり、非常に実践的な問題に対応するような、例えば当時NHKは、若者が非常に弱かったということで、若者のコミュニケーションの問題をやったり、ラジオの問題を調査したりしてずっと来たわけです。そこで何かよりどころになるものがないかと思っていたときに出会ったのが、田中先生がいろいろお書きになっていたコミュニケーションの論文だったのです。1972年頃に集中していますが、田中先生の考えていることが私にとってもピンとくるというか、これを何とか調査に適用できないかということを考えていました。

1973年はちょうどテレビ20年のときなのですけれども、このときに「生活とコミュニケーション調査」を実施しました。これは単なるテレビの受け手ということではなく、人々をコミュニケーションの主体者としてとらえるということを考えて、人々のトータルコミュニケーションの一部を日常化したテレビ視聴が形成すると考えるなら、その機能を正しく評価するためにはコミュニケーションの全体構造を明らかにすることが必要だという立場にたっています。

「生活とコミュニケーション調査」は全国調査です。世論調査所で年間のルーチンの調査以外にやる調査が2、3本ぐらいあるのですけれども、そのうちの1本に提案として通ったのです。実はこの調査名にはコミュニケーションという言葉はあるけれども、テレビとか、放送という言葉がないわけです。ですから、これを通すのは実は大変でした。そんなわけのわからないことをやってどういうようにテレビとか、NHKのためになるか、まさにそういうことなのです。この調査をやるときに、いろいろご指導をいただけないかということで田中先生にお願いをしたのです。これが田中先生と私とのかかわりの最初なのです。

ここでもう1つ触れておかなければならないことは、この提案を通すことが大変だったときの、

私の直接の上司だった吉田潤副主管についてです。この方が私のことを全面的にバックアップしてくれて、次長とか、所長とかによく説明して説得してくださったおかげでやっと思ったのです。この吉田潤さんという方は世論調査所の調査研究のレベルアップを図ってくれた最大の功労者なのです。ただ、そのときにはわからなかったのですけれども、吉田さんが田中先生と高校と大学で先輩後輩の間でした。吉田さんは心理学の出身だったのですけれども。そういうことがあって我々と田中先生との関係もものすごく近くなって、吉田さんは田中先生の調査面でのお師匠さんになりました。ちょっと考えられないようなことでした。

私としては日本人のコミュニケーションのあり方からマスコミとか、テレビについて考えようとしたわけです。牧田徹雄さんの『「テレビ視聴理論」研究50年史』の中で私のアプローチがコミュニケーション論の中に位置づけられて、コミュニケーション総過程論ということなのですから、そこでコミュニケーション行為と対人コミュニケーション観とマスコミ観の項目を数量化で分析することによって、基本的に日本人のコミュニケーション構造について、実証的なところからそれを理論として、知見としてそれを導き出した初めての試みだと紹介してくれています。ともあれ、この調査は、コミュニケーション構造に実証的にアプローチする出発点になったわけです。

田中先生のアイデアで個的自立パターンという、公・私・庶民・大衆という類型があります。これはずっと田中先生の理論の中にあっただけのものがこの調査の項目として盛り込まれました。この個的自立パターンというのは、1978年の『社会意識の理論』の「受け手」のところはこのデータが引用されています。また、その後の2005年の『テレビと日本人—「テレビ50年」と生活・文化・意識』の中でも取り上げられる基本的な分析項目になっています。これはそういう意味で、日本のマスコミ研究の中における1つの切り口として定着しているのではないかと思います。私は先ほどのコミュニケーション調査を受けて今度はテレビの問題をやろうとしていました。ただし、それもこれまでの切り口ではなく、基本にコミュニケーション、しかもその中にパーソナル・コミュニケーションというものがあるという前提に立って、「日本人とテレビ」調査を提案しました。

これは全国調査で、しかもサンプルのサイズが5400という非常に大きな調査なのです。我々研究所の人間というのはやはり自分の調査の提案が通ることが非常に大事なことで、結局それが通らないと仕事にならないわけです。そういうことで「日本人とテレビ」調査をやりました。そこで枠組みになった3つの調査の領域を考えたのですけれども、それが主体のレベル、環境の領域、それからコミュニケーションの領域というものを基軸に考えました。

藤田 このへんで田中先生のご意見を聞きたいのですが。今、小川先生がおっしゃったことで調査設計の段階で、特にトータルコミュニケーションとして人間コミュニケーションを位置づけ、その中にテレビ視聴の問題を付置するという構想は、小川先生の話の中でもキーワードとして出ましたけれども、コミュニケーション総過程論の考え方というのをテレビ研究の中に位置づけるという意味合いがあったと思います。田中先生はそのあたりはどのようにお考えになっていたかということをお話しいただければと思います。

田中 こうやってあらためて小川先生の時系列的なまとめを伺うと、実はかなり早い時期から『新聞研究』とか、『放送文化』とか、『サンケイ・アド・マンスリー』とか、マスコミ研究とそれまでのイデオロギー論、社会史研究等の接点みたいなことについて考えていたとあらためて自分でも思いました。非常に広い意味での総過程のイメージが、実は日高六郎さんのコミュニケーション研究の中にあるのです。有斐閣の『マス・コミュニケーション入門』の最初の章は非常に概括的なものです。

それと最後のほうでおっしゃった主体と環境の、環境のところについては清水幾太郎さんの考え方が部分的に藤竹暁さんのほうに引き継がれていますけれども、それとは違う意味合いであるのです。ですから、全体としては清水幾太郎、日高六郎、稲葉三千男みたいな線で、アメリカ型のマスコミ研究をできるだけ消化したいと、端的に言えば先ほどから出ているクラッパー流のメディアが超越的な力を持っていて、受け手がそれに対してさらされているととらえるのではなく、実は小川先生はNHKから派遣されて、BBCにもしばらく行っていましたし、レスター大学に在外研究で行っていました。むしろ、イギリス型の、後にマクウェールたちが集大成していく『『利用と満足(Uses and Gratifications)』研究』の流れにかなり小川先生自身が身を浸しておられた、そういう下地で、やはり結果として、かなりマクウェールの研究と響き合うような、そういう視点に幸いにして進むことができたと思います。

総過程については、法政大学社会学部における私の先輩の中野収さんが結構言っておられたのですが、残念ながら彼の総過程論はマスコミ文化論、あるいは評論になってしまったところがあるのです。そここのところを手堅く、相当中範囲の理論に近い、下からの積み上げて行こうという気持がありました。この仕事を80年代以降させていただいて、しかもその中から小林さんや伊藤さんのような人たちが育った。あえていえば、実は藤田さんも民間放送連盟でそういうところと同じような、響き合うものを持ちながら研究を進めておられます。ですから、NHK放送文化研究所と一緒にやらせていただいたお仕事は非常に大きな意味がありました。

僕はどうしてもハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』に対する違和感があるのです。口幅ったいですが、ハーバーマスの視点に対する乗り越えの1つのよりどころ、踏み切り板はこの実証研究なのです。もう1つの踏み切り板は記号論です。伊藤さんがよくやっておられるようなオースティン、サール型の仕事を含めて記号論と接合するという仕事がまだ残っていますけれども、それをやってハーバーマスを超えるというか、発展させる仕事とパラレルなのです。そのぐらいの位置づけをこれは持つと思います。

先ほど来出ている吉田潤先生という方は、僕も実は愛宕山に行って初めて僕の東京都立小石川高校の先輩にあたる人だと、しかも東大の文学部の中で社会学科と心理学科は隣同士だったものだから、なるほどということで小川先生のおっしゃるとおり一気に仲良くなったのです。実は『展望』に連載したものを『私生活主義批判：人間の自然の復権を求めて』として筑摩書房から出したものを、吉田潤先生は読んでおられて、あれをかなり評価してくださっていたのです。

その後、これも不思議なことなのですが、こういう調査データも含めて日本人の「私」意識、あ

るいは現在も私が追いかけている私と公を考えるようなところについての、もっと平たくいうとマイホーム主義のライフスタイルがどうなっていくのだろうかということに結構新聞社から問い合わせが来て、朝日新聞社でも、当時本社があったマリオンに吉田潤先生と一緒に言って説明してそれが家庭欄に載ったり、読売新聞の正月記事について照会が来て、ちょうどそのときにオックスフォードからプロフェッサーが来ていて、その人と国際文化会館でお会いして話をしていたら、そこに同席した読売新聞の文化部長からこれで正月企画を組みたいというような展開がこの時期にありました。

前半にお話しした80年代の緊張と背中合わせのところ、多摩移転みたいなことを考える一方で、小川先生とのプロジェクトが、調査の進展に応じてどんどん加速して行った感じがあります。

藤 田 小川先生、その後の経緯をお願いします。

小 川 個人的なことですけれども、80年の夏に放送世論調査所から（総合放送文化研究所の）番組研究部へ突然異動を命じられました。そうすると、番組研究部というのは世論調査のセクションではないわけですから、調査がやれなくなってしまうのです。私としては大変な迷惑だったわけです。そこで何をやるのかと、どうしたらいいかということを実際に悩みました。

実は、コミュニケーションをベースにテレビ調査をやる前の76年に、「放送意向調査における基本項目についての時系列的研究」をまとめていました。これはNHKが行った意向調査の中で、基本的な質問項目を選び出してそれを積み上げていくことによって、いろいろテレビ視聴の実態や意識がわかるのではないかという研究だったわけです。そこで番組研究部では、その延長上で質問項目ではなくて、それまで日本において行われたテレビに関する実証研究から何が明らかになったかという知見を探し出して分析することによって、日本人にとってのテレビ視聴構造が明らかになるだろうということで、「テレビ視聴理論の体系化の研究」を提案したわけです。

しかしこの企画は、調査をやるわけではないので、今までのアプローチとはまったく違うのでどう取り組んだらいいかとかだいぶ考えた末に、やはりこれは田中先生以外にいないという結論になりました。そのとき留学されていたということは存じ上げなくて、たまたま80年の秋に田中先生のところをお願いにあがったわけです。それが市ヶ谷の教授室で、これが大学なのかと思うような雰囲気の大部屋で先生にお会いしました。でも、あのときは田中先生とすごく話が合って、長い時間、楽しく過ごしたことを覚えています。これは田中先生に断られたら大変だと思って、私も真剣になって一生懸命お話ししたと思います。やはり何か響き合うものがあったのだろうと思うのです。

ただ、今回は調査の企画の指導ということとは違って、それまでの膨大な調査データから知見を取り出して分析して理論構築をしようというわけですから、これはやはり時間的な長さや人手がかかるということで、そのこともお話ししました。先生は留学後のご多忙の中でしたが、わかりましたということで引き受けられました。メンバーは田中ゼミの4人の院生でした。ところがスタートしたら私の人使いが荒かったのか、結局は残ったのは伊藤さんと小林さんのお二人でした。ある日大雪になったので、お二人は研究会は中止だろうと期待していたようですが、連絡がなかったので研究所のある愛宕山に雪まみれになりながら必死の思いで登ってきたことがあります。この件につ

いてはその後のだいぶ恨まれましたが、伊藤さん、小林さんのおかげでこのプロジェクトが達成できたことを感謝しております。

藤田 伊藤さん、小林さん、その当時、テレビ調査の理論枠組みをどのように構築されていたかということと、そもそもマス・コミュニケーション研究をしようと思っていたかということも含めてどうぞお話しください。

小林 そこでしょうね、一番のポイントは。伊藤さんの場合だともう少しコミュニケーションには近い立ち位置にいたのかという気もするのですが、僕にとってはマス・コミュニケーションというのはおおよそ距離のあったところでした。ちょうど修士論文を書き終わったところだったので、その書き終わった後に田中先生といろいろな機会でお話ししたときに、「実はNHKでテレビ視聴理論の体系化というプロジェクトがあるから、そちらへ行きなさい」みたいなことを言われました。正直「はい？ はい？」という感じでしたね。どこをどう結びつければいいのかと。

ただ、そのときに僕が何かあるかもしれないと思ったのは、デュルケームで修士論文を書いたのですけれども、やはり市民社会における記号だとか、シンボルだとか、それを巡るコミュニケーションみたいなものをデュルケーム研究の中から無理やり引き出したりしていましたので、そういうものをもう少しアクチュアルなところできちんと着床させるために、こういうことをやらなければならないと感じたことです。

その中で先ほどから田中先生のおっしゃっていたように、クラッパー以来のアメリカのマス・コミュニケーション研究、それ以外にマレットのような、ヨーロッパにおけるコミュニケーション研究、メディア研究も、この研究プロジェクトの立ち上げのときに、伊藤さんや僕が読んで、分担報告をしました。そのときに僕は確か藤竹暁先生の『テレビの理論—テレビ・コミュニケーションの基礎理論』を分担報告したと思います。若かったということもあのですけれども、かなり集中的にマス・コミュニケーション研究を勉強する機会がありました。

僕の正直な感想として、テレビに関してはもう少し別の理論的なディメンションがありうるだろうと、そのプロジェクトに参加してそういうものを報告する中で感じ始めていました。それがこの時期だったような気がします。田中先生よりもむしろ小川先生に相当絞られた記憶がありますが（笑）。

藤田 伊藤さんはどうですか。その当時どのように取り組まれたのか。

伊藤 個人的な話になって恐縮なのですが、田中先生を通して小川先生とお会いできたのは僕にとってはものすごく大きかったです。小林さんがデュルケームで修士論文を書いたのに対して、私はハーバーマスで修士論文を書く。社会学の中ではハーバーマスとルーマンがパーソンズの後の社会学の理論というこ



伊藤 守
早稲田大学 教育・総合科学学術院教授

とでかなり議論されたわけですが、マス・コミュニケーションの実証研究と触れ合う部分ではほとんどハーバーマスは出てこない。アメリカ流の効果研究の流れが強くて、社会心理学的なアプローチがテレビ研究の中心だったと思います。

その中で小川先生とこのプロジェクトを一緒にさせていただいて、僕の中ではハーバーマスの理論だけではなく、そこに実証とか、日本の現実はどう結びつけていくかという回路を作ることができた。80年代の実証的なプロジェクトへの参加は私にとって大変貴重で、本当にしごかれました。それと、田中先生がこうした実証もされる人なのかという別の面も見させてもらった。

小川先生が実施された「日本人とテレビ」調査はNHKの研究所の中で今日まで引き継がれる重要なパースペクティブを構成した研究ですし、その意味でもこの共同は重い意味があったと思います。

藤田 NHKの放送文化研究所の研究スタイルを作ったという意味では非常に大きい。その後の研究者は牧田徹郎さんはじめ、現在に至るまでの研究スタイルは「日本人とテレビ」調査から出てきたように思います。

80年代の日本の社会学における理論研究と実証研究

伊藤 田中先生と宮島先生は本当に同世代で、僕たちから見るとお二人の先生に代表される世代というのは理論家が多い。宮島先生のデュルケム研究を僕も学部のとくに読んでいました。

そのお二人が80年代に入ると実証研究に入ってくる。宮島先生もデュルケムから、EUのヨーロッパの統合問題や移民の問題へと研究をシフトされます。印象から言うと、社会学の中で80年代ぐらいに「理論」というものの位置づけとか、「理論」とは何か、ということについて日本の社会学の中で変容というか、「理論」という概念を巡って転換があるような気がするのです。それをお二人の先生はどのように受け止めておられたのか。船橋先生は世代としてはちょうど中間ですが、船橋先生からも、理論と実証の問題について、私なりに言えば「80年代を通した転換」について、お話しくださるとうれしいのですが。

藤田 宮島先生、いかがですか。

宮島 60年代の理論研究の1つの典型はパーソンズです。パーソンズのそのようなグランドセオリーを構築し、あらゆる社会現象を何らかのかたちで位置づけ、それなりに説明を与えることができるような、といっても機能主義的立場からの説明ですが、そういうものがありました。しかし、それに対し例えば私がデュルケムを考察したり、ブルデューを論じたりしても、これはそういう理論志向はなかったです。具体的な事象とのつながりというのを常に考えながら読むという面がありました。私の場合では、デュルケムの場合にはアノミーであるとか、分業の破綻の問題であるとか、ブルデューの場合には社会的な不平等の問題です。

ですから、パーソンズ理論の失効宣言みたいなものが70年代初めに行われ、それ以来理論研究はやはり現実の問題との相互対話ができなければ意味がないということになってきました。ルーマ

ンはちょっとへそ曲がりの人ですが、ハーバーマスなんかは明らかにそうです。そこで、80年代以降に理論に関心を持つ人たちは、必要ならば現実の問題にコミットするという姿勢をもつようになったのではないかと思います。

私の場合にはだいたい、デュルケームを読むことによって、1つにはブルデューを理解する素地ができた。ハビトゥスなどはデュルケーム的概念です。それともう1点は、ヨーロッパ社会を理解する場合に、ユダヤ系でマージナル・マンであったデュルケームを通してよくわかってきたという面があって、そこからヨーロッパ研究に行くことができたと思っています。

船橋 伊藤さんの問題提起はすごくいいと思います。これはいろいろな角度から議論されるべきと思うのですが、日本の社会学にとっていわば自前のオリジナルな、日本人が語る社会学理論をつくりたいという願望はずっとあったと思うのです。ただ、それは前提条件が熟するまでに相当な時間的経過が必要だったのではないかと思います。それから、他方、1970年前後のいわば知的な混沌状態の中から、いろいろな意味で、根本的にものごとを考え直さなければいけなかったわけです。アルヴィン・グールドナーの*The Coming Crisis of Western Sociology*が生まれて、それは田中先生も翻訳の一端を担っていらっしゃいます。僕らの世代にとってはグールドナーの本は非常に衝撃的でした。グールドナーに対しては評価が分かれると思いますが、少なくとも私どもの世代にとっては非常に衝撃的でした。

今日のお話の中でまだお名前が出ていない方といえば、高橋徹先生です。田中先生も宮島先生も高橋徹先生からいろいろな影響を受けていらっしゃいます。僕らの世代もそうです。グールドナーの翻訳も私の理解では高橋先生が中心的な努力をされたと思うのですが、そこでも根本的なパラダイムの見直し、それで自前のリアリティ感覚に立脚した理論をどうやって作るかという問題関心なんかも、そこらへんですごく喚起されたと思うのです、70年前後から。それで70年代の中盤以降はある意味でマルクスとパーソンズという2つの巨人の持つ掌握力というのか、包摂力というのがだんだん相対的に低下してくる。

その中でもう一度それらを読み直すという努力はもちろんさまざまにされてきたけれども、むしろ実体的に進行したのは現実の社会問題と対応しながら、小さくてもいいからオリジナルな、かつリアリティ感覚がある理論を作ったほうがいいのではないかという潮流が、日本だけではなく全世界的に強くなったのではないかと思います。日本で見れば世代的な問題で議論すれば、私はいわゆる団塊の世代に属しているのですが、我々の世代は、田中先生と宮島先生の世代も含めて先行世代の学説史研究の恩恵を非常に受けている世代だと思うのです。ある意味で学説の研究はほとんど一巡しているのです。

ヴェーバーについては厚東洋輔さんが非常にしっかりした著作を出していて、その前には折原先生がいらっしゃるとか、ほとんど一巡してそこに何か自分たちが付け加えるものが果たしてあるのだろうか。おそらく乗り越えられないだろう。むしろ自分たちの世代としては先行世代がやってくれたことを利用させてもらいながら、日本の現実に関ざった自生的な理論を作りたいという思いが結構あったと思います。橋爪大三郎さんなんかの行き方もそうだし、今田高俊さんもそうです。

具体的なフィールドということになればジェンダーの領域を拠点にした方もいれば、環境という新しい問題を拠点にした方もいれば、移民問題とか、フィールドが分散していきますけれども、それぞれ日本の現実に根ざした自前の自生的な理論形成をしようと、そういうのが早ければ80年代の初めから、遅くとも80年代の後半から90年代にかけては一斉に各分野で起こってきたのではないかと思います。

そういう意味で見れば田中先生や宮島先生がそれぞれのフィールドで実証に取りかかっていたことと、ほとんど並行的に私は環境問題でいろいろな調査を始めました。ある意味そこでマートンの見直しという感じもあったと思います。グランドセオリーというよりも中範囲の理論を大切にしよう。実はもろもろのグランドセオリーの膨大な消化というのが暗黙のうちに前提になっていて、その上で個別のフィールドに即した自前の言葉を語れないのだろうかというような世代的な動きになってきたのではないかと。

非常に個人的なことを言わせていただくと、私も田中先生とほぼ同じ年で、年齢的には38歳とか、40歳ぐらいのときにパリに留学しました。それでパリの組織社会学研究所に行ったのですが、そこでフランスの社会学を見ていろいろなことを学びましたけれども、一番大きく学んだことはフランスの理論形成というのはみんな実証をベースにしているという点です。当時フランスの四大社会学者はブルデュ、ブードン、トゥレーヌ、クロジエと言われていました。みんな実証を基盤に理論形成をしていました。そこは方法意識として一番学んだ点です。クロジエ先生は特にそうでしたが、ちょうどクロジエ先生の「戦略分析」という組織論と私の考えていた組織の原理論とがうまくつながってくるということもありました。個人的には留学の影響は非常に大きくて、田中先生もそうだったと思いますが、留学の後に新しい展開をしていくようになる。そのようなことと「実証を通しての理論形成」という話と、ちょうど世代的な流れとがマッチしていたのかという感じがします。

田中 二人の話を踏まえて、そうだなとやや懐かしげに回顧をしていました。オックスフォードから帰ってきて思った一番大きいことは、ヨーロッパの市民社会、その段階ではまずイギリスの市民社会ですけれども、それに比べて日本の市民社会の状況はだいぶ違うと。つまり、福武直、日高六郎、二人の社会学がリードしていった戦後日本の歴史過程の中で、民主化と歩調を合わせてパラレルに社会学が発展していったときと違って、80年代最初のところでは日本の市民社会はどうも順調に成熟、発展してきていない、さらに大きな課題を抱えているというのがありました。それは私と公という話と深く響き合いながらですけれども。

もう少し具体的なお話をパラフレーズすると、宮島さんもおっしゃっていましたが、構造機能主義の理論枠組みがやはりアウト・オブ・デートになって、富永健一さんから、吉田民人さんもがんばっておられたけれども、理論枠組みとしてはもちろん古典的な枠組みとして残り続けるものですが、現実社会の動きにどう対応するかというと、吉田民人さんの枠組みは情報化との連関で残り続けていきますけれども、経済社会学とリンクしたパーソンズ型の理論はこの段階では率直に言って可能性を失ったと思います。ですから、経済社会学に重点を置いた社会学から文化社

会学的なスタンスに重点を置いた社会学に大きく変わっていった時期がこの時期かと思います。ブルデューもそうだし、ギデンズもそうだし、ハーバーマスもちろんそうです。

そういうところからやや現実に対して批判的なスタンスを持った社会学が発展しているのは、いずれもヨーロッパなのです。アメリカはもっと時間がかかってもがくわけで、そのこのところはグールドナーの仕事との関連で議論、論点が残ります。もっと具体的にいうと、特に日本との絡みでいうと、情報化の進展に大衆消費社会化の状況が加重されてきたのはこの時期だと思います。85年からバブルが始まり91年に弾けるわけですが、あれはブルデューやギデンズやハーバーマス、あるいはそれと響き合うようにして考えてきた我々としてみると、巨大な意味喪失状況の出現なのです。これを分析できる社会学でなければだめだというのが、もう一度現実をとらえる、あるいは現実の中をくぐった理論枠組みに行こうという意識の基底にあった。

見田さんと栗原彬さんと私が編集委員になった『社会学事典』は84年から作業が始まって88年に出るわけです。あの編集作業をやってみてこれは船橋さんのおっしゃったこととまったく一緒なわけですが、社会学が本当に多領域にわたって発展していった多領域化をしつつ、あの時点でノーマルサイエンス、トーマス・クーンの言う定常科学として定着したと思うのです。それだけに各個別領域の中での社会学に入っていくと、全体的な理論枠組みが見えなくなっているということは、現在につながるかなり大きな課題になってきていると思います。

そういう変わり目で、リオタールが『ポスト・モダンの条件—知・社会・言語ゲーム』で言っていたようなポスト・モダンの状況が、この段階からまさにグローバルに広がるわけです。それと意味喪失状況の一般化と背中合わせですから、それをどうとらえるかというのが我々の社会学、あるいは社会学的想像力がまさに真価を問われるわけで、リオタールの問題提起、「大きな物語が終わった」ということも含め、あれをどうとらえるかというのはまた議論をしたいと思います。

理論と実証との結びつきの上に展開したテレビ研究

藤田 今の話の文脈にも乗ってくるのですが、80年代以降の田中先生のマス・コミュニケーション研究は、新しいマスコミの受け手の主体のあり方を調査で把握しようという野心的な試みだったと思うのです。そのあたりについてお話を小川先生からいただければありがたいのですが。

小川 先ほど出てきましたテレビ視聴理論の体系化に関する研究をまとめたわけですが、それを日本新聞学会と日本社会学会で結果を報告しています。日本社会学会では「コミュニケーション行為と社会関係—理論的仮説と実証的課題」というテーマで報告しました。これは1984年の京都での大会ですが、第1部がコミュニケーション行為としてのテレビ視聴ということで、「テレビ・コミュニケーション論からコミュニケーションとしてのテレビ論へ」というようなことを出しているわけです。30年間、日本人のテレビ視聴は送り手の論理を離れたところで独自の展開をしてきた。このことから、人々のコミュニケーション諸行動の中の1つとしてテレビ視聴をと

らえることの必要性を強調するというのが、「コミュニケーションとしてのテレビ論」です。

内容ですが、実証データから出てきた知見として3点が浮き彫りになりました。1つ目がトータルなコミュニケーション構造において対人レベルのコミュニケーションが中心的な位置を占めること、2つ目が対人レベルのコミュニケーションの内容がテレビ視聴のあり方を規定するライフステージごとのコミュニケーション行動において重要な意味を持つこと、3つ目がテレビ視聴が生活に不可欠なものとして他の生活行動、とりわけ対人コミュニケーションと結びつき生活環境の一部として定着すること。この3点を出しているわけです。3つ目が環境化したメディアと人々とのコミュニケーション構造で、これはコミュニケーション構造における基層のレベル、これが対人コミュニケーションなのですけれども、それから表層のレベルというのがメディアとの擬似的な第1次関係を形成する傾向が強まるということです。

第2部が「コミュニケーション行為と社会関係」で、理論的含意の検討を行ったということです。これは田中先生が中心になって報告されたわけですが、日本におけるテレビ視聴の分析枠組みは大衆社会論から生活世界論への移行として考えられるということ。それで生活世界が非常に大きく取り上げられまして、それと絡んでライフステージが社会学的な規定要因なのですから、それまでの性、年齢が変わって大きな意味を持ってきたということを提示しているわけです。理論的な含意として出てくるのが1番目がハーバーマスのコミュニケーション行為論、2番目がボードリヤールとデリダの差異化の概念、3番目がメルロ＝ポンティの生活世界論を上への2つの突破口の接点に位置づけるようなかたちの理論的な内容です。これについてはやはりいろいろな質問が出てきました。そこではっきりと実証研究とそういう理論的なものを結びつけようというか、そういう流れが出てきたところがテレビ視聴理論の体系化の研究なのです。

これがまとまったのが1985年3月で、私はこれを機にNHKを退職し、4月から東京国際大学に移りました。ほどなくして、高度情報社会におけるコミュニケーションの諸問題を解明する目的で、それまでの4人に加えて吉田潤先生などの新しいメンバーが参加して、田中先生を代表にして「現代コミュニケーション研究会」がスタートします。

その研究の一環として90年に放送文化基金の調査として「若者のテレビ視聴と生活感覚」調査を首都圏でやりました。これは伊藤さんが学会で報告していますが、これも1つの大きなポイントになった調査だと思います。そういうものを踏まえて今度は地域社会を対象にして情報化の問題を真っ向から取り上げていこうと、1991年、92年と科研費の総合研究Aというかたちでやったのが川越調査なわけです。そういう意味でコミュニケーションをベースにする研究の流れは全部つながっているわけです。

この研究会で吉田先生から調査の企画、実施、分析について多くの貴重な指導を受けましたが、1995年に急逝されます。その後、テレビ50年を機に「テレビ視聴理論の体系化の研究」の続篇として、『テレビと日本人』が2005年に刊行されて、吉田潤先生に捧げられました。7人の執筆者全員が先生に指導を受けているように、先生は日本のテレビ研究において忘れられない貢献をされたと思います。



小林直毅
法政大学 社会学部教授

伊藤 若者調査は放送文化基金の助成で、実におもしろかった。あのときには新しい視聴のタイプを出して、マス・コミュニケーション学会で報告、社会学会でも報告しました。今のテレビ・オーディエンス研究につながってくるような、従来のマスとしてのオーディエンスではとらえきれなくて、個々にセグメント化されていく、テレビの見方も変わっていく、というところを最初に問題提起した研究だったと思います。

藤田 私もマス・コミュニケーション学会に入りたてで、ドクターの1年ぐらいだったと思いますけれども、伊藤さんと小林さんがどういう方か知らない段階で発表を聞いていました。理論的な枠組みについてある意味模索的な、ある意味野心的な、今までのアメリカ型の社会心理学研究にない枠組みを作り上げようとしたように感じました。小林さんはどう

ですか。

小林 今、小川先生が紹介してくださった理論的なインプリケーションにあったボードリヤールとか、デリダというポスト構造主義の理論的な成果を一体どのように実証的研究と結びつけていくのか、逆に実証的な研究成果そのものがそうした記号学的な流れ、ポスト構造主義的な流れと結びつくのだということを84年の段階で言っていたと、何か懐かしいのと同時にそういう研究をしていたのだと思い出しました。今日のメディア研究につながってくる部分はそういうかたちで準備したのかという点で感慨深いものがあります。

田中 宮島さんと船橋さんにおわかりいただくように説明を追加すると、90年の「若者のテレビ視聴と生活感覚」調査というのは、あの頃よく言われていた高感性人間についてのインテンシブな調査なのです。これが先ほどの吉田潤さんが参加してくれた実証研究プロジェクトの最後の仕事になったわけです。そういう意味もあって非常に愛着のある調査なのです。驚くべきことに、今年の2009年のマス・コミュニケーション学会の伊藤さんが司会したワークショップで報告されていた方の議論に非常にきれいに重なるのです。

藤田 そういう意味では20年変わらないことをずっとやっていることなのですけどね（笑）。

田中 変わらないというか、発展してきているというか。

藤田 そのパラダイムの中で仕事をしているということなのです。

田中 小川先生もおっしゃった前段階の「知見集」の試み、76年の「放送意向調査における基本項目についての時系列的研究」とそれからずっとまとめられていく、その「知見集」をまとめるところで小林さんと伊藤さんが大変なご腐心をされたわけだけでも、これが実は歴史性と論理性の結合そのものなのです。無数の調査データのいわば2次分析で、2次分析の中の3段階ぐらいに分けて、重要な知見を島宇宙と称してグルーピングをする。これはまさに中範囲の理論の応用で

マートンがマスコミ研究でやっていたようなことを日本でやった。それを『利用と満足』研究」とリンクしてやったということだから、そういうことで鍛えられた小林さんと伊藤さんが藤田さんと一緒に今マスコミ学会の受け手研究の最前線にいるというのは、極めて自然な成り行きです。これは大変おもしろい経過だと思います。

小川 「若者のテレビ視聴と生活感覚」調査というのはやはり企業というか、組織の中での調査ではないということです。研究会と称した中で、それまでのものを踏まえて出てきた調査という意味では画期的で、中身もそういうかたちで出てきたと思います。

藤田 90年代に2つの訳書を出されています。まずは『テレビ視聴の構造—多メディア時代の「受け手」像』です。これは今おっしゃったテレビ研究の延長上にある訳業だと思うのですが、今読み返してみても非常におもしろいです。今となっては別の読み方ができます。非常に淡々としたテレビ視聴のデータ研究なのですが、例えば連続したテレビドラマなどをどれくらいリピート視聴しているかという問題で、視聴者がすべてのエピソードを視聴しないという調査結果があります。どのように視聴者が物語構造を形成していくか、そういう関心から読み直すと非常におもしろいデータです。この『テレビ視聴の構造—多メディア時代の「受け手」像』の翻訳は非常に大変だったと思います。翻訳されてみてどうでしたか、どんなことを感じられましたか。

小林 どちらかというテレビ視聴そのものについては割と慣れが出てきた時期なので、その部分を翻訳していく作業は何とか取り組むことができました。その本の一番のポイントが制度論的なアプローチも同時に持っているということです。当時、伊藤さんにしても僕にしてもまだまだイギリスの公共放送の状況などは十分に把握していなかったので大変でした。ちょうどピーコック委員会がBBCの改革を巡って重要な役割を果たした時期に書かれた本なので、そういう意味ではミクロなテレビ視聴からマクロな制度論へつないでいく、そういうものを翻訳する作業を田中先生のもとでやったことは重要だったと思います。今日のメディア研究の中で特にテレビ研究の領域では最近ますますそういうアプローチが必要になってきています。

藤田 先ほど田中先生の理論的な枠組みは一番抽象的な概念と理論的な概念とそれの歴史的な展開という意味でいうと、これはまさしくテレビ視聴の普及期を終えて、テレビ視聴が熟成してきた、そういう時期の多チャンネル化という時代背景もここに入ってきていますし、それから家庭の中のテレビ視聴の変容をそのまま写し取っているものだという意味では、非常に歴史的な意味があるテレビ視聴の1つの研究だと思います。伊藤さんはどうですか。

伊藤 小川先生がさっきお話しされていたテレビ視聴理論の体系化の研究とセットという印象を持っています。イギリスでもこういうかたちでこれまでの視聴研究に関してベーシックにどこまで確実に言えるかということをつなげた本が出版される、それと小川先生がやられたこれまでの知見を体系化していく流れが、ちょうどこの時期に出てきたわけですね。

田中 これは確かエーレンバークのほうだと思うのですが、現在BBCのデジタル化への対応の研究プロジェクトのリーダーなのです。今、日本でも通信と放送の融合ということが言われて、非常に微妙な段階で来ているわけです。そういうことをイギリスでBBCという組織の中で

対応策を練る研究プロジェクトのリーダーなのです。ですから、おっしゃるとおりその後のテレビを取り巻くメディアミックスがもう一段進んで、インターネットとテレビがどういう関係に立つかというのは今ものすごく重要な大きな問題になっているわけです。それへの接点の始まりです。

藤田 ブロードキャスティング、ナローキャスティングということも言っていて、少数者の中でのテレビ視聴はどうあるべきかということも提起されています。

田中 問題提起もそうですし、これは今現在も放送文化研究所の研究員の人たちにとって非常に重要な仕事になっています。

これからの社会学と法政大学社会学部の課題

藤田 ポスト・モダニティの問題に移行しようと思います。スコット・ラッシュの『ポスト・モダニティの社会学』を読ませていただいて、第1章を田中先生が訳されています。田中先生が第1章を訳しているのではなく、田中先生が書いているのではないかと思うような、先生の理論構築と非常にリンクする部分が多いと思いつつ読みました。お聞きしたいことが1つあって、読んでいて私のポスト・モダニティの認識となるほどと思うところと、少し認識が違う部分があります。

モダンとポスト・モダンをどう位置づけるかという問題の中で、スコット・ラッシュはモダンが分化の時代であると言っています。例えば美的、美学的なものが自立化する時代であると、宗教的なもの、形而上学的なものから美学的なものが自立する分化の時代であると言っていて、その中で美的なリアリズムというのは内在的に自己言及的とも言っていますし、あるいは自己法則的と言っていたか、とにかくそれ自身自立していくというのが近代という時代なのだと言っているわけです。

それに対しポスト・モダニズムというのはそうではなく、分化からまた脱分化の過程に至るといってスコット・ラッシュは位置づけているわけです。この点は共感できる部分はあるのですが、ポスト・モダニズムの時代というのはシニフィアンがシニフィエを失っていく時代であるともしています。この部分は日本のポスト・モダン理解の中で非常によく言われている問題です。この2つの指摘がどのように彼の中で結びついているのだろうかということ、田中先生の中でそのことが結びついているのだろうかということを、今あらためて読んでみてお聞きしたかったのです。

田中 前者のほうはギデンズとウルリッヒ・ベックとスコット・ラッシュの3人で書いている『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』という本を読んでも、三者三様に違うのです。スコット・ラッシュはギデンズのお弟子になる人ですけれども、ギデンズさんに対してやや反批判みたいなことをして三者三様に違うのです。ポスト・モダニズムがモダンが分化していく1つの文字どおりポスト・モダンで、全体のモダンの中の一部だというのはギデンズなのです。スコット・ラッシュはそこにもう少し切れ目をはっきり入れています。

その場合の脱分化みたいところはルーマン型ではなく、ジンメル型なのです。ジンメルの *Sociale Differenzierung* を引き継いでモダンの状況に対してポスト・モダンと質的に違う、それがさ

っきおっしゃった美的リアリズムです。そこはスコット・ラッシュが日本に来たときに一緒にいろいろ議論したのですが、スコット・ラッシュはもともとアメリカの大学で現象学、美学みたいなことを勉強した後、ロンドンに行ってギデنزの教えを受けているところがあります。アメリカのノースウェスタンか、現象学の本を出しているところがありますが、あそこでスコット・ラッシュは勉強してからロンドンへ行っているものですから、そこが1つあるでしょう。

それから後者のほうはおっしゃる通り、今の日本のメディア状況は特に民間放送の番組は全滅状況です。シニフィエなきシニフィアンが、もう広告も含めて。

藤田 むしろ破綻をすでに予言しているのがこの書だと思います。

田中 そうですね。そういうことでおそらくこういうのを非常に早く感じ取ったから、いち早く浅田彰氏はポスト・モダン論をやめて、丸山眞男型のモダニティー論に戻ったわけです。でも現在のシニフィエがなくいたずらにシニフィアンだけが粗製濫造されて流されているという状況こそ、マスコミ研究者は分析しなければいけないと思います。さっき言った意味喪失状況のメディア版です。もうさすがにこの状況で戯れていられないです。そういう状況にまで来ていると思います。

藤田 この問題はたぶん今後の社会学の問題のところで、もう1度議論したいと思います。船橋先生、先ほどは80年代の学部教育のあり方の問題がありましたが、90年代の大学院教育のあり方についてはいかがでしょう。

船橋 私がフランス留学から帰ってきたのが1988年です。ですから、実質的に90年になってから社会学研究科の大学院で初めて授業を持つようになりました。そこで大学院という枠組みの中でも田中先生のゼミと併存しながら研究、教育に従事する機会を得ました。ぜひ今日話したいと思っていたのが、私のゼミには田中先生のゼミ生、指導教授として田中先生のもとで勉強している諸君がかなり大挙して来てくれました。それが私の最初の立ち上げを支えてくれました。

やや乱暴なくくり方をすれば、広い意味での文化社会的なテーマを田中先生が追究されて、私は社会問題の社会学、特に環境問題を中心にやっていました。基本的に物象化論的なパラダイムは根底において共通なのですけれども、具体的にはかなり違った肌合いでやっているゼミの両方に院生が参加するかたちができたのは、院生諸君にとってもかなりよかったのではないかと。

何人かの院生とはかなり深いお付き合いをする結果になって、特に深い議論をした方は、お二人います。博士論文をまとめられたこの二人とも田中先生が指導教授ですけれども、私ともかなり深い議論をする機会がありました。それが90年代の社会学研究科の中で記録にとどめていい成果かと思っています。

一人は鈴木健之さんです。彼は『社会学的機能主義の再構成ータルコット・パーソンズとポスト・パーソンズ派の社会学理論化ー』で、特にジェフリー・アレクサンダーのところにも留学していて、非常に精力的にネオ機能主義のことについて博士論文をまとめられました。私の理解では田中先生は初発の時点からパーソンズに対してはある距離を取っていて、相対的に距離があるし、懐疑的、あるいは批判的な視点を持っていたのですが、その田中ゼミで鈴木さんは真正面からパーソンズの議論をし、ネオ機能主義をやった。それだけの包容力のあるゼミ運営をなさっていたこ

とがよくわかりました。それで私も遠慮なく彼といろいろ議論をして、彼の理論研究上の貢献は日本の中でもっと注目されてもいいのではないかと考えています。そういう成果が1つありました。

もう一人は田所恭子さんです。彼女は結婚して堀田恭子になりましたけれども、彼女は多摩移転後の第1期生です。それで学部の2年のときから田中ゼミに入っていて、実は2年のゼミ選びのときに私のところにも来ていて、両方を見ていた方ですが、結果的には田中ゼミにずっと入っていましたが、修士課程のときから私のゼミにも来てくれました。新潟水俣病問題のまさに実証的な中範囲の研究を成し遂げました。悪戦苦闘があったのですが、公害問題はいろいろな切り口がありますけれども、堀田さんは被害者の生活経験に注目して、「水俣病の受容と克服」ということを主題として博士論文に取り組みました。まさに学部以来の田中ゼミで鍛え上げていたような個のパーソナリティの内面世界に入っていくという視点を確保しながら、社会問題を考えるという労作で、彼女にとっても2つの異質なゼミを行ったり来たりしながら、研究をまとめることができたのはよかったです。

そういう意味で90年代の社会学研究科で田中先生のゼミ生とともに博士論文のまとめを担うことができたのは、私も非常によい経験だったと思っています。それを法政の1つの学問的歴史として語っておきたいと思っています。

宮 島 僕はまだ日が浅いので、学部生をゼミで持たずに、たくさんの学生を相手に講義をしていますから、法政の文化的風土がまだよくわかりません。これからの課題は社会学部の学生が、シニフィアンが何を具体的に指しているかのレフェレントを持たないままにシニフィアンをもてあそぶという、これはメディアをやる学生にたぶん多いのではないかと考えるのです。やはり何とか現実とのつながりを常に見るような指導をしていただきたい。これはメディアをやっている学生だけではなく、ほかに文化の問題をやっている学生だとか、すべてそうです。社会学部の教育としては必要ではないかと思っています。

それから、もう1つは言い古されたことだけれども、先進社会として日本を規定してしまうと、なかなか何が問題か見えないということなのです。当然ですけれども、第三世界を見れば問題がまさに可視的であるわけです。最近見ているとポスト・モダンの状況はポスト・モダンなりのミゼールがあることがわかる。昨年派遣村みたいなかたちで問題が出てきている。そういうポスト・モダン状況のもとでの問題の表れ方を教えることも必要だと思います。

これはシティズンシップの問題ではないかと思っています。つまり、国籍を持ち、日本人である、しかしいろいろな権利を行使できない。正規の職を持たなければ住宅1つ借りられないとか、ローンも借りられないとか、そういうかたちで市民権が行使できなくなっている人たちが出てきています。市民権のハードルが高くなっているのです。昔だったら、あまり身元調査などはなくて、職や住宅にアクセスできたと思うのですが。

大学院指導については、船橋先生が言われたことに何も付け加えることはないです。

藤 田 社会学の展開とも少しかかわってくる話なので、関連して意見を言っていたらと思います。伊藤さん、どうですか。

伊藤 今、宮島先生からシティズンシップという言葉が出てきましたが、今年、公共圏のシンポジウムで船橋先生とご一緒しました。そのときにも話したことですが、早稲田大学で「メディア・シティズンシップ研究所」を立ち上げました。その意図は先ほど宮島先生がおっしゃった、文化、メディアの分野におけるポスト・モダン状況の中で、シニフィアンだけが踊っている状況に研究も融合しているような文脈をどこかで変えていかなければいけないという思いが強くありました。文化的なシティズンシップの問題を含めて、メディアが在日外国人の問題や様々な社会問題をどう可視化していけるのか。メディアで文化や報道・ドキュメンタリー制作を実際にやっている方々とアカデミズムを結びつけて、研究とメディア実践を有機的に結び付けることを意図して研究所を立ち上げました。学部、大学院の教育を含めて、アカデミズムと日本の市民社会を担う人たちをどうやって接合させていくのか、これは大学の1つの大きな課題だと思うのです。これは社会学全体にとっても課題ではないかと私は考えています。

それから、もう1つは船橋先生が指摘されたように、上の世代が学説、理論研究をしてくれていてその恩恵がすごくある中で、そこから我々が個々のリアリティに即してどう自前の理論を作っていくかというフィールドに立てた。その指摘に私はまったく同感なのです。しかし、逆に、現在は、大学院の学生を見て思うのですが、個々のリアリティで何かを語ろうとするけれども、私たちが享受してきた恩恵が伝わってなくて、理論を知らない、理論に行かない状況がある。昔のように学説を教えればよいということでは絶対にすまないのですが、研究者を育てていく、大学院の教育を充実させていく、そのときに「理論」をアクチュアリティのあるものとして学べる場をどう作っていくかということが、一回転して我々に問われている。その2点を指摘したいと思います。

小林 それでいくと、僕はアクチュアリティそのものがやはりかなり内容的に問題があると思います。僕はメディア史を担当していてこれで2年目に入りますけれども、痛感するのはやはり歴史の問題なのです。もう1つ弱いのは歴史をどう学ぶのか。歴史をどうとらえて今日のアクチュアリティの中に持ってくるのかということが、どうもなかなかうまくいきません。現代的なものに対してはいろいろな関心を向けるのですけれども、そのそのその成り立ちというところをどう考えていくのか、それが特にメディア研究の中でも随分問われているような気がします。そこにもう少しきちんと向き合っていきたいです。田中先生からいろいろ勉強させてもらった分を、僕自身は今後そういうかたちで展開していきたいと考えています。

藤田 僕も言わせていただくと、カルチュラル・スタディーズを始めたのは私たちの世代なわけですが、私たちの世代ではマルクス主義のネオマルクス主義への移行と、記号論との接合という問題があったと思います。それが非常に新しいメディア認識であり、社会認識であった。理論的な背景から個別の問題、文化の問題へというベクトルがあったと思います。今は個別の問題しなくて、ここでスコット・ラッシュをもう1回読み直すとなるほどと思うのです。そういう理論的な背景のベクトルみたいなものをもう1回戻していかないといけないかと。

だから、私たちの世代は理論から個別問題へ行ったのですけれども、もう1回個別問題から理論へ折り返していかないと、自分の研究の今後のスタイルとしてはまずいと思っています。そのこ

とはまさしく今大学院の人たちにグランドセオリーというものがあるのだと、感じさせるのは私たちの責任でもあると、そんなことを思いながら、もう1回田中先生の著作を読み直してみました。

船橋 これからの法政大学社会学部と関連大学院の将来ということになります。社会学部の理念自体はもう非常に明確に表現されているのです。つまり、人間論的な関心を柱にした社会問題の理解と解決というかたちです。結局いろいろな試行錯誤があったのだけれども、そういう定式化にだいたい収斂してきています。それで社会学部として教員集団の知的な活動がある時期、再結集するとか、統合していく、求心力を高めていくリズムというのが何回かあります。1つは「統合と多様化」をテーマにしたシンポジウムを学部創立40周年記念事業の1つとして実施しました。それが1つの結集軸だったのです。それから15年ほど経ちましたが、2007年から、「公共圏と規範理論」をキーワードにした大きな科研費プロジェクトを開始し、30人ほどの社会学部教員が参加しています。そこにはもちろん田中先生も藤田先生も小林先生も宮島先生も参加して、再び大きなウェーブとなっています。

田中先生の学問的出発点は世代の基礎経験として民主主義の問題がずっと一貫してあるし、人間論的関心も一貫してあるわけですが、今それを再構築していくキーワードは公共圏だろうと私は考えています。そこにまさにメディア研究、すなわち、マスメディア研究、ミニコミ研究も含めてのメディア研究、それが非常にかかわってくるだろうと。期せずして、このタイミングにおいて公共圏論を1つの軸にしながら、メディア研究、それから文化社会的なものをもう一度インテグレートする努力がなされているわけです。その中から今後の日本の社会の現実に根ざした理論形成と、古典的なものへの回帰を同時に追究していく、理論と実証の往復運動ということを経験しながら、そういう方向で研究や教育を展開していけばいいのではないかと考えています。

特に私はメディアについては素人ですが、メディア関係の先生方に対する問題提起としては、日本の中の公共圏の強化のキーファクターとして市民研究所がこれから非常に大事になってくると思います。各政策問題領域、社会問題領域の自立した市民研究所ができて、それがこの情報を公共圏の中に発信していく。政策提言型のNPOと言ってもいいし、市民シンクタンクと言ってもいいですが、そのへんをメディア研究の焦点にしていくことがむしろ必要なのではないかと。つまり、インターネット時代のよさはそこだと思っています。そういう方向で行くと、まさにこれからいろいろ大事な課題も設定できるし、学生に対する助言もいろいろできるのではないかと。社会学部に社会政策科学科がありますけれども、私は学生諸君に「君たちが将来、政策形成型のNPOの担い手になるというのも1つの有力な道だよ。公務員になるのももちろん大事だと思うけど」ということを話しています。

藤田 田中先生、大学院教育と日本の今の学的なあり方と教育の問題の話に最終的になったと思うのですが、今の話を踏まえてお話いただければ…。

田中 39年間お世話になった法政大学社会学部に私は何が貢献できたのか、大変忸怩たるものを感じながらフェードアウトしていくわけです。だからこそ、法政大学社会学部の研究と教育がさらに発展していただきたいという念願を込めて、申し上げたいと思います。

1つは非常に素朴なことからお話しします。一見理論志向が強くてほとんど実証音痴かと誤解されかねない宮島さんや私のような人間が、実は学部3年生のときに調査実習に行くのです。私は福武直さんに連れられて宮城県に行き、古川市というところで農村調査をやりました。実はその近くで小川文弥先生が生まれ育って、仙台出身で東北大学を卒業されてNHKに来られていて、そこで出会いがありました。不思議な出会いがいろいろなところで多層的に重なるわけです。やはりいくら理論研究をしても、また実証に戻るというフィードバックメカニズムが内在しているというのは、社会学研究者の特徴かもしれません。

2つ目にそのことと重なるのですけれども、最初から藤田さんがおっしゃっている歴史性と論理性、あるいは理論性とのつながりのところは、先ほどは本郷の3年生のときに城塚登先生のフォイエルバッハの講義を受けて、それが人間的・自然的諸力の1つの契機になっているという話をしました。4年生のときに非常勤で法学部に家永三郎先生が来られていて、僕はその講義を聴きにきました。本当に学生数が少なくて、20人いたかないかですけれども、全部授業に出ていたのに最後に試験を受けたらBでした。

腑に落ちなくてなんでだろうと思っていたら、別の機会に家永先生にお会いできたときに「覚えているよ。君のはね、常民という言葉を使っていたんだよ」と言われました。民俗学の宮本常一さん、そしてその先にさかのぼると和辻哲郎さんです。要するに家永さんは戦前、戦中の自分を批判して、その関係で和辻さんの歴史学に訣別しているわけですけれども、私は非常に不用意に和辻さんのキーワードをこともあろうに、家永三郎さんの授業の答案に使ってしまったわけです。僕の書齋には和辻全集がそろっていて、『町人根性』などをずっと読みながら考えているのですけれども、もちろんそれは乗り越えていかなければならない対象ですが、和辻さんを乗り越えるというのは大変なのです。そこがある意味ではずっと残っている私の日本社会との接点みたいなところがあります。

そのこととどうつながるのかよくわからないのですけれども、先ほど藤田さんにご質問をくださったラッシュの『ポスト・モダニティの社会学』を僕が翻訳したら、大変おもしろい反応がありました。強烈に反応してくれたのは今田高俊君と厚東洋輔君なのです。この二人とはその後ずっといろいろなところでコンタクトがあります。今度の『社会関係の理論』に至るまでずっとその二人はいいコメントをしてくれています。

今田君と僕は方法論的スタンスがまったく違いますけれども、社会の現実についての分析がどうこうということになると十分な議論ができます。そういうところは今の大学院教育との関連で非常に示唆的だと思うのです。幸いにして船橋さんたちのご尽力で法政大学では3学科のどれについても、理論と実証のリンケージを図っていく、そういう中でマートン型の中範囲の理論のスタイルで社会学研究を進めていく、つまり実証に根ざした理論構築はかなり定着してきていると思います。問題はそれをもう1段、もう2段、質的に深化させていくにはどうしたらいいかという状況になっていると思います。

そこでヒントがあるのは、先ほどはアメリカの社会学はルイス・コーザーとか、アルヴィン・グ

ールドナーとかの世代の後、ちょっと停滞してきていると、むしろイギリスのギデンズ、フランスのブルデュー、ドイツのハーバーマス、その後のということをお話しました。現在の法政大学の大学院教育を考えると、船橋さんもおっしゃった今イエール大学にいるジェフリー・アレクサンダーの社会学理論、あるいは理論社会学、それからハーバード大学にいるスコッチポルの歴史社会学、これが非常に示唆的です。スコッチポルはいろいろなところで実証研究をしながら、今あらためてアメリカの市民社会におけるシティズンシップ、政治的な成熟を民衆のライフスタイル、生活意識と社会意識のところで実証的に分析をするというモノグラフを、シカゴ大学にいた頃からずっとやっています。ジェフリー・アレクサンダーとスコッチポル、理論枠組みと実証に根ざした歴史社会学の接合みたいところからアメリカ社会学の次の発展可能性について、僕はかなり期待できるものがあると思います。

それと同じようなところを法政大学社会学部もまずは大学院生諸君が、もう少し他大学の大学院と交流をしながら、刺激をいただきながら深めていく。そして先ほど宮島さんも私も学部の3年ぐらいから農村調査等々をやって実証分析をというときに、福武直先生は「必ず川島武宜さんの民法学を勉強しなさい。人類学、民俗学、そういう社会学の周辺の領域の仕事を必ず勉強して社会学の勉強を深めなさい」とおっしゃった。日高さんもそうです。文化人類学その他のことを勉強しながらパーソナリティ、文化の話がされていたのですと。

今の法政の大学院教育にウィークと感じるのは、社会学の中が発展して多領域化しているから、社会学の中の異なった領域のことをちょっと勉強するだけですむと思っているのです。これはまったく違います。もっと社会学の外に出て、外からいろいろなことを学ぶというスタイルを身につけて、それで修士論文を仕上げたらアメリカでもヨーロッパでも東南アジアでもアフリカでも、よその大学の大学院に行って博士課程で勉強してくるというスタイルを、法政大学社会学部の大学院生も身につけてくださるといいというのが僕の最後の願望です。ありがとうございました。

藤田 みなさん長時間のご議論、ありがとうございました。